

357

63



始



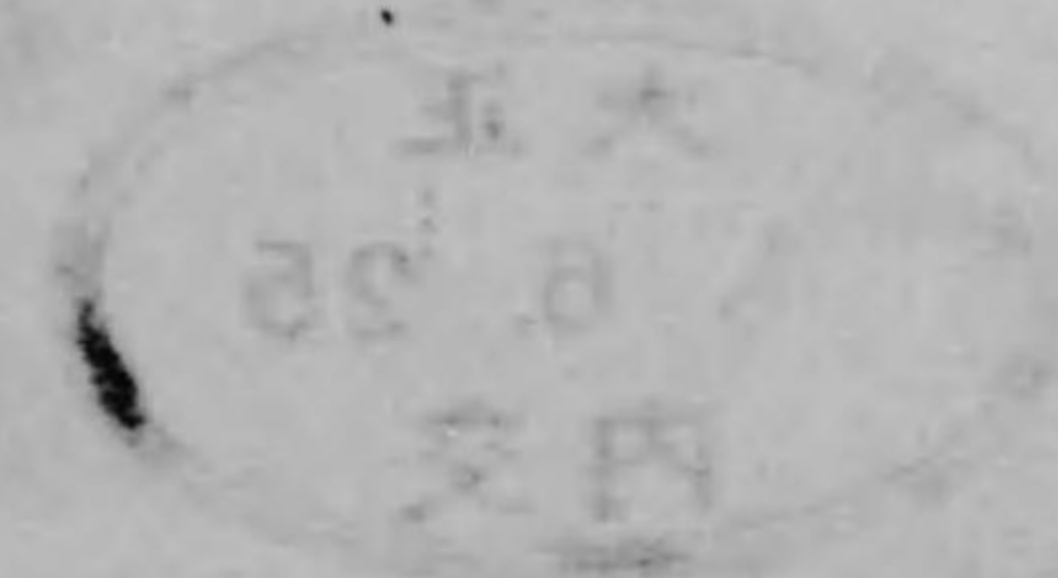
357-63

C
108



著原チツイウキンセ
 ヤ 三 ハ
 譯 造 關 浦 三

大正
 4. 6. 25
 内交



譯者序

□『何處へ往く』や『火と劍にて』等世界最大の歴史小説に非凡の才能を示したセンキウイッチは、永久に消え去らぬ若き日の思ひ出を書いた。其れは即ち此のハニヤである。

□此の天才が生ひ立つ頃に生の暴風が吹き荒んだ。人にはわからぬ涙と苦しみとを経験して、少年は秘かに何ごとをか悟つて行つた。

□少年には大人の忘れ果てた悲哀がある。少年は涙を流して、吾が途を見出さなければならぬ。少年は大人より大なる経験をなし得る事がある。

□少年の熱情は眞を捉ふる天才である。けれ共また此の熱情は少年を欺く事がある。

□若い日の思ひ出は老ひし人の心になづかしい涙を誘ふ。年とればとる程、其の涙の思ひ出は美しくなつて来る。人は若い時に熱い尊い涙を流して置かねばならぬ。

□興味深き天才の若き日の思ひ出、其の戀物語、其れから来る永久の教訓と力を、若き人々と、若き日を思ふ人々に呈せむ。

大正四年六月十七日夕

譯者 三浦 關 造

ハニヤ



ミコライの爺さんは、臨終の床で、ハニヤを宜敷頼みますと云つて死んで仕舞つた。私は其の時が十六歳で、ハニヤは十五歳、もうそろそろ乳嗅い子供の時代を脱する頃でした。

私は死んだ祖父さんの枕下に泣き伏して居るハニヤを宥めたり、すかした。幸つどの事で連れ出して、内のお父さんの會堂へ行つた。會堂の扉は開け放しにしてあつて、マリヤ様の像の前には、二本の蠟燭がどもれて居た。其の燈はくつきりと暗の中に漂ふて居たが祭壇の上は淡氣味悪るい程暗かつた、二人は肩をすり寄せ

ハニヤ

て坐つた。ハニヤは悲しみ悶え、あまつさへ、歎歎と不眠と斷腸の想どに疲れ果て、其の可愛らしい便り無い頭を私の腕の上に休めた。斯うして二人は、何時迄もジツと黙つてゐて居た。夜は深く更けて、會堂の直ぐ隣りに一番鳥が鳴いた。古色を帯びた時計の音がヂンヂンとなつた。四隣聞として深淵の静寂が傾して居る。只ハニヤの苦しい吐息が其の静寂を破るばかり。遙かに雪を含んだ風の音がうなつて、時折、會堂の窓がガタ／＼と打顛ふ。私は一言も慰めてやる言葉が出ず、只保護者か、兄かのようにハニヤをずっと引き寄せた。そして少つとも祈れない。百千の印象や感じが、心を動かして、種々な面影が目の前に渦巻く。けれども、其の渦巻の中から、静々と一念一想が閃めき出て来た。眼を閉じた此の蒼い顔、私の腕に休んで居る此の便りの無い哀れな

娘、其が今や私には妹の様になつて、妹の爲なら命も棄てやう、妹の爲なら百萬の鞭刑に身を放り棄ててもよいと云ふ氣になつた。私の弟のカジオが今しも會堂に這入つて来て、直ぐ私共の後に膝まづいた。續いてお父さんも、五六人の下女下男も来た。皆が何時もの通り祈りを捧げる。お父さんが大きい聲で祈禱の文を讀み上げらるゝと、私共が其を繰り返したり、又答へたりする。顔の淡暗いマリヤ様は始終親切そうに此方を見て、憂き事多い私共の家庭に連なり、幸も禍も共にして、み足のもとに集る人々を祝福して下さる。

お父さんが祈を上て死者を祭られる間、僕等は『永の安を得さへ玉へ』と繰り返してはミコライの名を唱へた。ハニヤは復聲をあげて泣き出す。

祈禱が終へると、皆休む爲に散々に別れた。私は屋番の婆さんベ
ングロシアに、ハニヤを室に案内して、お前も今夜は一緒に休め
と命じ、ハニヤと別れて、自分の室に歸つて、さて着物を脱いで
床に就くと、大好きだつたミコライの死んだのが痛ましかつたけ
れど、保護者の役割を得た一種の高慢と幸福とが座ろに感ぜられ
る。私は僅か十六歳であつたけれ共、弱い者、頼りの無い者を助
けると云ふ事が何となう自ら偉ら相うに思はれて、急に大きくな
つた様な氣になつた。「正直な老兵士、ミコライ、お前はよい旦那
様に孫娘の行末を頼んだ。大丈夫だぞ。心配せずに墓の中に眠つ
てお呉れ」と私は心の中で云ふてやつた。
眞實の告白であるが、其の時私は、決してハニヤの行末を氣にし
なかつた。もう直ぐハニヤは大きくなるだろふ。結婚しなければ

ならなくなるだろふといふ様な考へは、私の頭にいさゝかも浮ん
で來なかつた、私はハニヤが始終私と一緒に居つて、妹の様に待
遇はれ、妹の様に愛せられ、悲しい事はあつても安心して行ける
事だと思ふた。昔からの習慣に依ると、總領息子は弟達の分前よ
りは五倍程の財産をどつてよい。そして弟や妹達も此の習慣を尊
敬して、決して之に苦情を銜んではならない、私は一家の長子で
ある。だから私は未だ學生の身の上ではあつたが、内の財産を自
分のものとして管理して居つた。私のお父さんは此の地方では有
名な財産家である。私の内は歴々の富豪ではなかつたが、云はゞ
貧乏貴族で、食ふ事には困らず、死ぬる迄は故郷の古巣で安々と
豊かな暮しをする事が出来た。比較的に云はゞ私は富有な方だか
ら、自分の未來もハニヤの未來も平靜に考ゆる事が出来た。又何

事がハニヤに起つても之を避ける事が出来るし、必要なものがあれば辨じてやる事も出来るから大丈夫だと思つて居た。

私はそんな事を考へて寝込んだ。さて、翌朝から私は後見人の役を初めたが、其のやり方の滑稽で子供らしかつた事つてない。でも今も其の當時を想ひ出すとなづかしくて堪らない。

カジオと私が食堂に這入ると、お父さんもバニーさん（家庭教師）も已に食卓に就て居て、二人の妹は何時もの通り、高い椅子に腰掛け、足をぶらめかしては片言交りにお饒舌して居た。

私は妙に濟ましてお父さんの安樂椅子に腰掛け、食卓の上を覗み廻して、給仕の小僧にふり向き、鋭い命令的の調子で、

『おいバンナ、ハニヤの皿を持って来い』と云つた。

バンナといふ言葉には意味を含ませ、又力を込めて云つた。今

迄這麼事は無かつた。ハニヤは今迄は衣裳部屋で食事をして居た。私のお母さんは、一緒に食堂で食べさせたがよいと云はれて居つたけれ共、ミコライの祖父さんが『それは善過ぎる。ハニヤは御主人様と同じ様にしてはならぬ』と云ふて一緒に食事するのを止めて居た。然るに今朝私は一人の新來の客のある事を皆に紹介した。正直なお父さんは、鼻から煙草の煙をふき出して、絹のハンケチで微笑を蔭くされた。バニーさんは親切な人なだけけれど、佛蘭西の貴族の血を受けた根深い貴族的人であつたから、何だか厭な顔をなされた。召使の小僧フラネクは呆然口を開けて私を訝しげに眺めて居た。

『バンナ、ハニヤの皿だよ！聞へたか？』と私は繰り返へした。

『畏まりました！』とフラネクはハツと氣の附いたと云ふ調子で

答へた。

「告白するが、旦那様になり済した私は、衷心満足に堪えなかつたものの、少しも笑を見せつけなかつた。

暫らくすると皿は準備され、扉がガタンと開つて黒の着物を着たハニヤが這入つて来た。(其の着物は昨夜女中と屋番の婆さんが縫つて呉れたのだ) 其の顔は蒼く、眼には涙の跡をどよめて居て長い黄金の髪は房々と後ろに垂れ、其の編み合せた端の處に、黒縮緬のリボンを二重に結びつけて居る。

私は立上つて取り急ぎハニヤを座に就かせた。私の華やかなやり方は反つてハニヤを當惑させ、混乱させ、苦ませて居つたらしかつたけれど、私は斯ういふ悲しい時には彼女にとつては静かな淋しい人の居ない隅の方が、親切な友達の賑かな歓迎よりもよい

と云ふ事を知らなかつた。で、私は巧くやつて居るのだと思つて居たけれど、實は反つてハニヤに當惑させて居たのだつた。ハニヤは黙つて居て、只私が何を食べたいか、何を飲みたいかと尋ねる時ばかり返事をした。

『いゝえ、もう何もいりませぬ若子様』

ハニヤは昨日の出来事から一層臆病になり従順になつて居る。

食事が終へると私はハニヤを側に腰掛けさせた。

『ハニヤ、これからお前は私の妹だよ、決して私に若子様など、云ふんじや無いよ』

『申しませぬ、若……、申しませぬヘンリー様』

私は妙な感じがして、ハニヤと室の中を歩いたが、何を云ふてよいやら分らなかつた。私は喜んで慰めてやりたかつたが、慰

めやうとすれば昨日死んだミコライの事を云はなければならなくなる。すると復ハニヤを泣かせて苦痛を起させるばかり。で、二人は室の隅にあつたソファアに腰かけた。ハニヤが私の肩に頭を休めて居ると私は其の黄金の髪をなでゝやる。

ハニヤは妹の様に私に密接いたが、心の中に嬉しい信頼の情が湧いて来たのだるふ、眼に一ばい涙を湛えて、激く泣き出した。私は出来る丈よく慰めてやつた。

『復悲しくなつたのかハニヤ』と私は云ふた『お前の祖父さんは天國に居らつしやる、でね私が……』

涙が出てそれから云ひ得なかつた。

『若子様、私祖父さんの處に行きたう御坐います』

私は最早棺桶が出来て、ミコライの死骸を收められつゝあつた

のを知つて居た。だから棺に收めて仕舞ふまで、ハニヤには行かせまいと思つて私一人で行つて見た。

途中で私はバニーさんに會つたから、一寸何か御相談がありますから待つて下さいと云つて、ミコライの死骸の前で祈禱を捧げ葬式に關する最後の命令を下し、さて佛蘭西女なるバニーさんの處へ行て、短かく紹介の言葉を述べた後、忌中の一週間が終へたらばハニヤに佛蘭西語と音楽を教へて下さる様に相談した。

『ヘンリーさん』とバニーさんは答へられた。バニーさんは、私が爺見た様に命令するものだから態度怒つて居らしたに相違無い『其れは大變結構でせう。私もあの女を大變可愛がつて居ますから。でもね、あの女の事はお父様お母様の意見通りにすべきものか、又はあなたの意見通りに内の家庭に入るべきものか、私は知

りません』

『彼女は、私が保護して居ます』と私は口を尖らして云ふた『私が何とでも致します』

『でもね、私はあなたの保護を受けて居るのでありませんから、お父様、お母様のお許のある迄は待つて居て下さいね』

佛蘭西女の反抗には腹が立つたが、併しお父さんを説き伏せる事には甚だ巧く成功した。小さい時からハニヤを教へて居たお父さんは、猶一層ハニヤを教育してやる事を喜ばれたばかりか、私の熱心を褒めて下さつた。

『成る程』と父さんは云はれた『お前は若いけれど、眞面目な事に気が附いた。それはよい事だが熱心ばかりぢやよくない。忍耐して何處までもやらなければ』

お父さんには満足の意が見えた。一家の主人の役を取つた私はお父さんを怒らす段の事か、反つて慰めとなつたのである。お父さんは私のやり方が誠に子供らしいとは思つて居られたけれ共、動機がよいので、得意然として、私の魂に蒔かれた種子が失はれて無かつた事を感謝して居られた。まして私は父さんの大好きの子だ。私は小さい時こそお父さんを怖がつて居たれ、今はお父さんを動かす事が出来る。でお父さんは私の爲には弱くなつて、私の云ふ通りにして下さる。お父さんは又ハニヤをも愛して、力の及ぶ限りは喜んで世話して下さい。だから私は、少つとも父さんの反對を受けなかつたのである。

パニーさんは、いくらか氣を悪くして居られたけれ共、根が親切な方だから、優しくハニヤに會つて下さつた。下女下男ども

も、親しい考の様にせず、若い貴婦人の様にハニヤを遇して呉れた。年は若くても、一家の長子の意見は甚だ權威あるものであり又それが父さんのお望みでもある。一體昔からの習慣で長子の意見は父母に訴ゆる権利があり、誰れも其れに勝手な反抗をすることは出来無かつた。そして長子を呼ぶには、生れた時からバニク（若子様）と云はなければならなかつた。下僕達は、弟妹達と等しく、若子様を敬する事を教へられ、其の敬意は一生涯消えなかつた。長子が他の子供より多くの資産を受け嗣ぐと云ふ事は、法律には無いが、昔からの習慣で、代々傳へられたものである。人民達は私を未來の旦那様として尊敬して居つたし、ミコライの爺さんは、凡ての事を許されて、私の名を呼んでは居つたが、胸にはそらいふ敬意を抱いて居た。

私のお母さんは家の内に、藥劑室を持つて居て、病人がある自分から出かけて見舞つて下さる。コレラが流行した時には、命がけになつて、醫者達と一緒に茅屋に終夜を過された事もある。お父さんはお母さんのなさる事を淡氣味悪く思つてゐらしたけれど、『義務だ、義務だ』と云つて禁じなさらなかつたばかりか、反つて助力して下さつたのである。お父さんは、労働者が借金を返せない時は、免じて下さつたし、自分は天性疝癩待でありながら、人の失策を直ぐに許してやり、屢々村の人民が人から借錢して拂へないで困つて居る時には拂つて下さつたし、又結婚式を司さどつて下さつたし、村の子供衆には教父となり、私共には百姓を尊敬しなければならぬぞと命じなかつたし、年とつた小作人には帽子をとつて丁寧に返禮をなさつた——其ればかりでは無い、

時々小作人を呼んで事状をお尋ねになつた位だから、百姓達が私共の一家に對する敬意の程も推察が出来る。

二

ミコライの葬式は死後三日経つて執行された。近隣の人々は、下僕ではあつたが、敬愛されて居つた此の老人を記念せむとて續々集つて來た。吾々は死骸を内の墓場なる、陸軍大佐だつた祖父さんの直ぐ側に埋めた。葬式執行中、私は暫らくもハニヤを放さなかつた。行く時はハニヤと櫓で一緒だつた。飯る時も一緒になろふとは思ふて居たが、お父さんは人々を墓場から宅へ招いて、暖をどらせ且一元氣つかせて飯したいから私に案内せよと命ぜられた。暫らくすると、私の親友のミルザ、セリム君がハニヤを占

領してしまつた。彼は宅の隣人ミルザ、ダビドビチの息子で、鞆鞆人の血を引いた回教信者である。併し、其の先祖は昔から此の附近に住んで國民として貴族として結構に暮したものである。

私はウストリトスキ（櫓の名）に乗つて行かなければならなかつた。ハニヤはお父さんやセリム君と他の櫓に乗つた。見れば親切相なセリム君は自分の毛皮の外套をハニヤに着せ、御者の手綱をどつて、シツシツと馴鹿を驅りたてる。馴鹿は疾風の如く飛んで行く。

家に飯るとハニヤは祖父さんの室に泣きに行つたが、私はお父さんの案内して來られた客様に應接しなければならなかつたから、急いでハニヤの處に行く事が出来なかつた。

どや斯うする内に人々は飯つてしまつた。只セリムが残つてを

るばかり。セリムはクリスマス休日の残りを私共と過し、且つは私と一緒に少し稽古しやうといふのであつた——私共は七學年で、もうそろそろ試験になるから——けれ共、櫓に乗つたり、射撃をやつたり、擊劍をやつたり、獵をしたりする方がタシタスの年代記や、ゼノフォンの歴史を譯するよりも面白かつた。

此のセリムといふ男は極めて愉快な奴で、浮浪漢見た様で、極めて悪氣ある、そして色男の様に熱情家だつたが、又極めて同情の厚い少年だつた。家の者は誰だつて彼を非常に可愛がらぬ者とは無かつた。只私のお父さんばかりは、彼が私より射撃も劍道も上手だつたので嫌いであつた。バニーさんはどうだといふに、あの兒が巴里っ兒の様に巧く佛蘭語を饒舌るといふので大氣に入りで、あの兒の事ならまるで頭も無いといふ位。セリムの口は何

時も開つて、何か饒舌つて、佛蘭西女と來たら何も彼も忘れる様に好きであつた。

お父さんは彼をカンリツクの信仰に改宗させやうと思はれて居つたけれど、彼はモハメットを崇拜して、新しいカンリツクよりは、古いモハメットの方がよいと云ふて居た。併し彼の父親はトルコ人や鞆鞆人に同情がない。彼の先祖はもと、リシユアニアに殖民して、其處で富豪貴族の生活をして居た。そして其の先祖代々の財産はヤン、ソピースキーから、ミリザ、ダビドピチに譲り渡された、ヤンは、輕騎兵大佐でヴーナで偉業をたてた人で、其の肖像畫はホールレリーの家に掛けてある。

其の肖像は私に不思議な印象を與へたことがある。大佐は怖い男で、其の顔にはコーランの文章の如く凜然劍の様なものが神の

手で書かれてあつた。其は色の黒い顔、秀でた頬骨、不思議な光を放つて居る斜めになつた眼を持つて居たが、其の眼は一種の特異性を有して真正面から眺めても横から眺めても、眺める人を見つめる。

然しセリムは先祖の誰にも似て居ない。その母親は韃靼人ではなく、クリミヤで彼の父親と結婚した。彼女はコーカサスから来たのである相な。私は其の母親を記憶して居ないが、世間に比類の無い美人であつたと云ふ噂である。そしてセリムは其の母に水の一滴と一滴との如く似て居ると人々が云ふて居た。

セリムは本當に不思議な奴だ。彼の眼は韃靼人の眼の様につり上つて居ない。くるくとして黒く、物思はしげにうるんで居るデオルチャの女の眼の様だ。其の眼で静乎見つめると何とも云へ

ない程なつかしく爽かになる。其麼眼を私は今迄一度も見事な無い。又今後も見る事は出来まい。そして其の姿のしやんど整つた様は彫刻家の鑿でけづられた彫刻品の様にけ高い。顔色は稍黒いが極めて美妙で、唇はいさゝか厚くて、覆盆子の様に赤い。微笑の可愛ゆさど云つたらなく、齒は眞珠の様であつた。

ところがセリムが友達と喧嘩する時は何うだど云ふに、(よく彼は喧嘩した) 其の優しい見えは急に魔夢の様に掻き消えて、怖ろしいと云はむばかりに其の眼は大きくつり上り、狼の目の様に光り、顔の青筋が腫れ上つて全面が赤黒くなる。怒つたかと思ふ一刹那眞の韃靼人の人相が現はれる。けれ共此の變化は束の間、セリムは直ぐに泣き出して許してお呉れと云つて接吻する………で誰でも彼を許してやる。彼は綿々たる眞情と高貴な衝動に至る一大

ハニヤ

傾向を有して居た。けれ共彼は無遠慮で、腕白で、自制といふ事が出来なかつた。彼は師匠同様に、馬を驅つたり、射撃したり、撃剣したりした。彼には非常な天分があつたけれ共、怠惰だから成績は中位であつて、私は此のセリムと兄弟の様な仲善しで、時は喧嘩もしたが、直ぐに仲直りして、永へに友誼は破れないで續いた。休暇とか休日には屹度私共はホーレリで休みの半分を過ぎたものである。

さて、モコライの葬式が終へて、残りのクリスマス休日の終る迄、セリムは私の家に居る事となつた。

食事が終り、來客が歸つて仕舞つたのは午後四時頃であつたろふ。日足短かい冬の日は早傾いて、黄昏の影が窓から伺き込む。當に蔽はれた軒端近くの木立は眞赤な夕日を浴びて、鳥がガアガ

ア鳴く。窓から見ると、鳥の群は森から池の方を横切つて殘照の中に浮んで居る。食堂は蕭として、パニーさんは何時もの習慣通り、自分の室に吉凶の圖引きにお出でになつた。お父さんは室を上り下りして煙草を燻らして居らつしやる。まだ髪は短かい二人の妹は、お互に黄金色の髪を捲いて居た。ハニヤとセリムと私は窓の下ソファに腰かけて、池畔や、彼岸の森や、暮れ行く夕日を眺めて居た。

間も無く眞暗になつた。お父さんは夕べの祈禱に出かけられた。妹の一人は年長の妹の後を追ふて隣りの室へ走つて行た。後に残るは私共ばかり。セリムが何か語り出そうとした時、ハニヤは走卒として私にくつ附いて、私語いだ。

若子様、私何か怖い様な氣がしてなりません………本當に怖い

様な……！」

「大丈夫だ」と云つて私は引き寄せた「斯うして密接して居なさい。僕の側に居れば、何も怖い事はない。僕は何も怖くない。其に僕は何時でもお前を守つて居るのだもの」

其うは云ふたものゝ、私は何だか怖かつた。室が暗くなつた故か、ハニヤの言葉の勢か、或はミコライの死の面影の爲であるか何だか不思議な感じがして来た。

「燈火が欲しいの？」と私が云ふと、

「はい」とハニヤは答へた。

「セリム君、フラネクに燈火を持って来る様に云つて呉れ玉へな」

セリムが椅子から跳ね上つたかと思ふと、戸の外に荒々しい騒動が聞こえる。と思ふと、扉がバタリと開つてフラネクが躍り込

んだ。其の後手をどつて居るのがセリム。セリムは其の肩を攫んで、獨樂でも廻す様にクル〜と振り廻すので、フラネクは馬鹿見た様に怖い面をして居る。そうしてフラネクを椅子の處まで振り廻して来て、嚴然と立上つて云ふた――

「お嬢様が恐怖遊ばして居るから、汝の主人が燈火を持って来いと命じなさる。持つて来ないと、汝の首を切り落すぞよ」

フラネクはランプを取りに行つて直ぐ持つて来た。けれ共、泣きたどれたハニヤの眼は光に射られて痛む様だつたから、セリムは其を吹き消した。私共は再び神秘な闇にとざされた。あたりが蕭寂どなつたかと思ふと、秘つそりとして皎々たる明月が流れ込む。ハニヤは屹度恐れて居たらしい。ズツと私にくつ附いて来たので、私は其の手をどつてやつた。セリムは私共の反対側の安樂

椅子に腰掛けて居たが、騒いだ後に何時もやる通りに、物案じて居つたが、暫らくするとジツと思ひに更つて居た。

「セリム君に何か話して貰ひませう」と私が云つた「セリム君は大變話が上手だから、話して貰はふかね」

「どうぞ」

セリムは眼を擧げて稍暫し考へた。月光が鮮かに彼の愛らしい半面を照らす。暫らくして彼は同情に満ちた低い顔を聲で語り始めた。

「あの森を越え、山を越えて、遙か向ふのクリミヤに占をするララーといふ親切な女が居た。或る時、トルコ王が其の女の草屋の前を通りかゝつた。此のトルコ帝はハランと云ふて非常な金持で金剛石の柱で建てた珊瑚の宮殿を持つて居た。其の宮の屋根は眞

珠であつた。非常に廣い宮殿で端から端迄行くのに一ケ年間かゝつた。そして、王様は、冠に天の星を鑲めて居た。其の冠は太陽の光の様に輝いて、其の頂には、魔法使ひが月の世界から切り取つた三日月の影があつた。處が王は泣いてララーの家の前を通つて居た。泣いて泣いて其の涙が道に落つると、落ちた涙一滴が一輪の白百合になつて咲きにほふた。「何うなさいました。何故お泣き遊ばすのですか」とララーが尋ねると、

「泣かないで居れるものか」とハランが答へた「俺は夜明けの空よりも美しい只一人の娘を持つて居るのに、其れをあの怖ろしい目ん玉を持つて居る悪魔に捧げねばならぬ」

セリムは茲で話を切つて沈み込んだ。
「ハニヤさんは眠つたのか？」と彼は頭をあげて私に私語いた。

『いゝえ。眠むつては居ませぬよ』とハニヤは眠むそうに答へた。
『泣かないで居れるものか』とハランは其の女に云つた(とて彼は復話を續けた)『俺は只一人の娘を持つて居るのに、其れを鬼に捧げなければならぬのだもの』

『お嘆き遊ばすな』とララーが云ふた『翼のある馬に乗てボラの岩屋にお出なさいまし。其處へお出になりませすと、妖雲があなたを吹き拂ひますけれど、此の小さい種子をお撒きちらしになれば、雲は急ちに消えて仕舞います』

セリムは猶も續けたが復話を切つてハニヤを見る。ハニヤは今度は本當に眠むつて居た。激く疲れ苦しんでグウ／＼熟睡して居るのだ。セリムと私は彼女が醒めない様にとて呼吸の音も出さなかつた。けれ共、乙女の呼吸は平穩で時々深い嘆息をつくばかり。

セリムは顔を手の上に休めて、嚴かな思ひに更る。私は空を仰いだが、さながら身には天使の如く羽根が生えて天つ大空をかけ登る様な気がした。私は心身に滲み互る柔らかな悦びを感じたが何と云つてよいやら分らぬ。ハニヤはさも私の胸に信頼すると云はむばかりにスヤ／＼と寝込んで居る。私は身體中が思はず慄える様な気がした。——其れは地上のものとも思はれぬ。何やら分らぬ新しい幸福、まだ聞いた事の無い聲が私の靈魂の中に産れたのだ。そして其が合奏の様に彈奏吟唱せられる。あゝ私はハニヤが可愛ゆくてならなかつた！私は兄として又保護者としてばかりでは無い、無限にハニヤを愛した。
私は唇をハニヤの髪にあて、接吻した。其の接吻は斷じて地上のものでは無かつた。接吻した事も覺えなかつた位だから。

ハニヤ

セリムは急に身を慄はして、冥想から醒めた。そして、
「君は甚だ幸福だよ」といふた。

「うむ」

併し、私共は其の儘にしては居れなかつた。

「目を醒さない様にして、室に運んでやろうぢや無いか」とセリヤが云ふと、

「僕が一人で擔へて行くよ。君其の戸を開けて呉れ玉へ」と私は答へた。

私は眠ひつて居る乙女の頭の下から静かに手をぬぎとつて、乙女をソファアの上に乗せ、それから注意して抱き上げた。私はまだ小さかつたけれど、何時にも似ぬ力が湧いた。ハニヤは軽くてグタリ／＼して居た。私は難無く運んで行た。セリムが次の室の

扉を開けると、其處には燈火がともれて居る。其處を通つて、ハニヤの爲めにあてがつた緑の寢室に這入る。床はもうのべてある。ストーブには火がボン／＼燃えて居る。ストーブの横に石炭をつゝきながら、ペンダントの婆が腰かけて居る。婆さんは私を見て驚き、

「まあ、おご苦勞様。お娘さんは目が醒めなかつたので御坐いますか？」

「あい黙れ！」と私は怒りを含んで云ふた。「娘ぢや無い。お嬢様と云へ。お嬢様は疲れて居られるから、醒ましちやいけ無い。着物をして静かに寝させて上げて呉れ。ねえ、婆さん、お嬢様は祖父さんを無くして、孤兒になられたんだから、親切に慰めてあげなくちやならないぞ」

『孤兒、可愛想に、孤兒、ほんとに！』

と正直な婆さんは激動して繰り返して居た。

セリムは婆さんに接吻して、茶飲みに歸つた。

セリムは茶飲みに行くど、いや早何も彼も打忘れて巫戯けて居たが、私は其ういふ氣にはなれず、最初は悲しい感じがして居たが、次には子供の様に巫戯けては、嚴かりした保護者にはなれないと思つて黙つて居た。セリムは今晚復大騒ぎを起した。今度はお父さんだ。時も時、丁度會堂で晩の祈禱をやつて居る時、セリムは庭に飛び出して氷屋根の上に匍ひ登り犬の吠え真似を初めたのである。庭に居つた犬は何匹もあつちこつちから走せ集つて大きい聲でセリムと一諸に吠ゆるので、私共は祈禱がされなかつた。

『セリム、お前は氣狂にでもなつたのか？』とお父さんが云はれた。

『御勘辨下さいな。私や、回教的に祈禱してゐるんです』

『宗教を玩弄にしちやいけなげ。あう、あう！』

『然し、私がカソリックになつたら、お父さんが何處に怒るやら分りません。で回教的にやるんです』

お父さんは弱處を衝かれて黙つて居られた。それから私共は寢室に行つた。セリムと私は同じ室に寝るのである。私が着物を脱ぐど、セリムも同様祈禱もせず裸體になつて居るので私は斯う尋ねた——

『セリム、實際君は少つとも祈禱しないのか？』

『勿論するさ。お望ならばやつて見ようか』

斯う云つて彼は窓ぎわに立ち月を仰いで、兩手を月の方に延べ
「オー、アラ！アクバル、アラ！アラ！アラ！ケリム！」と大聲
に唱へ初めた。

眞白な着物を着て、大空を仰いだセリムは神々しいと云はむば
かりに美しく、私は爲めに目をそらす事も出来なかつた。

するとセリムは斯う云つて説明して聞かせる。

「何うしたらいいんだろふなあ。僕は人には一人の妻しか持つ事
を許さないで、自分には欲しい丈何人でも持つモハメットの坊主
を信ずる事は出来ない。それから僕は酒が好きだ。するとモハメ
ット教徒たらずばならぬ。僕は神を信ずる。そして祈る。けれ共
何も知らない。只一つの神がある事を知つてゐるばかり。其つきり
だ」

暫らく間を置いて彼は復續けた。

「君、何か知つてるか？」

「何を？」

「僕は頗るよい巻煙草を持つてる。お互に最早子供ぢやないから
煙はふぢやないか？」

セリムは床の中から跳ね起きて、巻煙草入をとり出した。私共
は火を附けて、ゴロリと横になつてスバスバ音のしない様に煙ら
した。室が深閑となる。

「君知つてるか」と暫時の後セリムは復云ひ出した「僕は君を悪
んでる。君は實際大きくなつたなあ」

「大きくなるのは、僕の望むところだ」

「君はもう已に人の保護をする様になつたね。僕も誰からか這麼

結構な事を頼まれるとよいなあ」

「其れ事柄が仲々出来るものか。出来た處で、ハニヤの様な娘が何處に居るものか」と云つた私は復大人の様な調子で續けた。「僕はもう直ぐ學校は止す。内に斯ういふ義務のある人は學校には通へないからね」

「あや、君は氣が狂つて來たんだな。何故學問を止すのか。學校は大切ぢや無いか？」

「學問は好だけれど、義務は何より大切だ。僕は両親が僕と一緒にハニヤをワルソウに行かせるでなければ學問はしないよ」

「其れ事柄にも見られない事だ」

「中學時代は駄目だろふけれ共、大學に入つたら許されるだろふ。一體君は學生とは何の事であるか知つてるか」

「知つてる。知つてるども。君は屹度、彼女の保護者になつて結婚して仕舞ふんだな」

私は床の上に起き上つた。

「セリム、君は氣が狂つて居るよ」

「何故結婚しないのか。學校では自由に結婚してはならないが、併し單に學生といふのなら女房を持つてよい。子供も持つてよい」

とセリムが云つた。

其の刹那一切の大學の特權といふものは悉く私に無必要のものとなつた。そしてセリムの質問は暗黒な私の心に電光の如く輝いた。百千の思想が鳥の如く一時に私の頭に翔び亂れた。愛らしい孤兒との結婚！然り其が電光の如くに閃めいた。而して其は思想感情の新しい閃光であつた。丁度暗黒な私の心に誰か光を照し

て呉れた様な気がした。今迄愛は深かつた、けれ共其は友愛であつた。然し今や其の光に依つて心は蔷薇色の不思議な暖みを呈して來た。其の綺麗な髪を持つた天使、最も慕はしい可愛いハニヤとの結婚。私は弱い低い聲で反響の様にくり返へした。

『セリム、君狂氣したんぢやないか？』

『僕は君がハニヤと最早戀してる事を物を賭けて誓ふよ』とセリムは云ふ。

私は答へなかつた。燈火を消して、枕の隅を捉へ、其れに接吻を施し初めた。

『そうだ。僕は已にハニヤを戀してる』

三

葬式が仕舞へて二三日経つて、父さんが私を呼び寄せなされた。私は岐度、ハニヤに對するやり方がよくないので咎められるのだと思つて吃々して居ると、お父さんは、私の熱心と義務の念の強いのを大變喜んで、私を賞めて抱いて下さつた。そして激く可愛しいと思つた時ばかりしか云はない『吾が屬だ』を幾度も繰り返された。けれ共、私のやり方はお父さんの氣に入らなかつたらし

50
お父さんは、ハニヤを私の考で、妹同様に教育するのを喜ばれないで、

『何もお前を責むるわけぢや無いが、其はお母さんのなさるべきことだ。お母さんが、自分にお好きな様に定めなさる。併しね、ハニヤの爲に何うしたが一番よいか考へるばかりならよい』と云は

ハニヤ

れた。

「お父さん、教育は少つとも害にはなりませぬ。お父さん、ご自分
分に度々仰つしやつたではありませぬか？」

「男なら勿論だ」と父さんの答「男の教育は地位を進めるが、女
はそうで無い。女は自分の地位相當の教育を受けなくちやならぬ。
ハニヤは普通の教育があればよい。佛蘭西語とか音楽とか云ふも
のを稽古する必要は無い。ハニヤは普通教育までにして置く方が
餘程亭主によく仕へる！」

「お父さん！」

お父さんは驚いて私を見られた。

「何だい」

私は眞赤になつた。血が全面に迷しるやう。眼は暗む。ハニヤ

をお下婢同様にすると私は私の想像の世界にとつて侮辱此の上も無
い事。私は憤怒の聲を洩さずには居れなかつた。そして其の侮辱
がお父さんの口から洩れたのだから猶しも苦しい。私は初めて燃
ゆるが如き青春の信仰に、現實といふ冷水をぶつかけられた。幻
影の美はしい城を、人生といふ彈玉で撃たれた。虚偽に眼の醒め
た苦しさを消極主義と、不信仰で防ぐ思ひだ。けれ共冷水を赤熱
した鐵の上に落とすと、シュツ／＼と音を發して蒸氣になる様に、
人の燃ゆる様な魂に、現實の冷かな手がふれると、急ち自身の熱
で現實を暖める。

お父さんの言葉は急ち私を疵けた。不思議な痛手を負はせられ
た。痛手を負ふて私はお父さんを恨むではなくハニヤを恨んだ。
けれ共、其は只青春の羈氣の中にある反抗心で、直ちに其の感じ

を追つ拂らつて仕舞つた。お父さんは私の赤熱した心を知らないで、只私が義務に忠實なものどばかり思つて居られた。私は一體其ういふ感じを興へる氣質を以つて居た。そこで、お父さんは其の上には怒り出さないで、ハニヤの高等教育に反抗する心をいから弱められた。私は、未だ外國に暫らくは御滞在なさるお母さんに手紙を書いて、此の事件に就て、最後の處置を仰ぐといふ事をお父さんに約束した。私はこれ程長い心情の籠つた手紙を書いた事は無い。ミコライ爺の臨終や遺言や、私自分の要求、恐怖、希望といふものを描いて、お母さんの心の中に何時も顔えて居る同情の琴の絃を強く動かした。そして力の及ぶ限りハニヤの世話をしてやらなければ私は良心の呵責に遭ふて堪えられぬといふ事も描いた——一言以つて云へば當時の私の意見で判ずるに、眞の

傑作で、好結果を來すに定つて居る程のものであつた。先づ之で少しは安心が出来て一生懸命返事の來るのを待て居ると、漸く二通の手紙が來た——。一つは私宛一つはバニーさん宛。私は全然勝利を得た。お母さんは只ハニヤの高等教育を許して下さつた計でなく、出來る限り助力してやると云つて下さつた。

『お父さんさへよければ、私はハニヤを家族同様にしたいのです信心深い忠實な老人ミコライの記念の爲に』と其の手紙には書いてあつた。そこで私は大勝利を得た。セリムも心から其を喜んで呉れた。——セリムは保護者であるかの様に、ハニヤの事に就ては氣をもんで呉れたものだ。

けれ共、セリムがハニヤに對して同情と優しさを表はせば表はす程私は腹立しくなつた。私は自分の心に氣づいた其の時以來ハ

ニヤとの關係が悉皆變つて仕舞つたと思ふ。私は其の後ハニヤと一緒に居ると罪でも犯して居る様な氣がした。ハニヤの切情や罪の無い親しみは全々私には消えて仕舞つた。數日前此の乙女は私の胸にすやくと休んだが、今は其れを懐つたばかりでも髪がズーンとする。數日前迄はお早うとか、お休みなさいとか云つて其の蒼白い唇に接吻したが、今は手に觸れてだに、火が燃え附く様であり、美妙的な顫えが全身を貫く様である。初戀をして居たのだ。それにハニヤは何も知らないで、元の通りに私に密接して來ると私は女が厭では無いけれど、罪を犯して居る様な氣がして心中一種の不快を感じた。

愛は私に未知の幸福をもたらして呉れたけれ共、また未知の苦痛をも持つて來て呉れた。若しも此の苦悶を打明すべき人か、時

時泣きすぎるべき人でもあつたらば、心の重荷を半分はおろす事が出來たに相違無い。セリムに凡てを打明かそうかとも思つたが彼の性質を怖れて遂打明す事が出來なかつた。私の性格は始終一人で考へるといふたちで、セリムとは大違ひであつた。私はセンチメンタルで、セリムはセンチメンタルの事には一錢位の價值も見じめぬ男。私は悲しい時ばかり戀に陥るのだけれど、セリムは愉快な時ばかり戀する。私は私の戀を誰にも知らせまいとして隠して置いたから、誰も氣の附くものはなかつた。幾日も経たない内に、私は誰から教はるとも無く、本能的に戀の發表を隠す術を覺えた。即ちハニヤの前でまごまごしたり顔を赤らめたりしなくなつた事である——一言以つて云へば注意して居る人の目を欺く程狡猾になつた。私はハニヤに自分の感情を打明すのに少しも計

略など用ゐず、只愛するばかりであつた。一人で居ると、時々堪らなくなつて、ハニヤの着物の裾に接吻したくなる。

セリムは幾日も経たないのに突飛な悪戯をして笑ひ、私共二人を揶揄つて喜んで居た。彼は或朝ハニヤの顔を見て笑ひ出して、回教に改宗してバニー、デイーブと結婚したらよかるふとお父さんに云ふた。お父さんも、佛國女のバニーさんも彼の頓智機なに怒る事も出来なかつた。セリムはハニヤを見ると聲を出して笑き出し、少つとも氣をわるくしない様に揶揄つて皆をドツと笑はせるので、ハニヤの氣に入つて居る。彼がハニヤに對する態度には蔽はれぬ優しさど注意深いところがあつて、しかも其の衷心の快活は凡てのものを征服した。セリムは私より一層深くハニヤに信用されて居た。ハニヤが眞からセリムを好きだつた事は確かだ。

セリムが室に這入つて來ると何時でもハニヤは急に快活になつた。そしてセリムは何時でも私を玩具にした。特に私が悲しんで居るのを見ると『君、一飛に大人になりたいと思つて居るんだね』と云つてひやかした。

『おい君、一體君そりや何だね。君はきつと坊主になつちまうんだぜ』と彼は云ふた事がある。

其の時私はヒヤリと今迄に無い感じをして俯向いて顔の赤くなつたのを隠した。けれ共お父さんが煙草の煙を吹いて答へて下さつた。

『神様の爲になるんだ、神様の爲に』

程無くクリスマス休日も終つた。何うかして家に止りたいどの私の望も駄目になつた。或夕、明朝は早くセリムが出立するとい

ふ事になつた。早朝に出立をしなければならぬ。セリムはお父さんの居るホーレリーの方へ廻つて行くからといふので、私共は未だ真暗い六時に起きた。起きたが、私の心は荒寥寒冷な冬の曉の様に淡暗い。セリムも不機嫌で居る。床から匍ひ出るとセリムは一向面白くない情無い氣がすると云ふた。私もそうだといふた。着物を着て朝食へに行く。庭は真暗。物凄く吹雪が渦巻いて礫の様に顔にぶつかゝる。食堂の窓には燈火がともれて、入口には橋がある。その中に荷物がチャンと準備されてある。馬は鈴をチャラ／＼ならして居る。犬は橋の廻りを吠へ廻つて居る。この様を見ると、氣が小さくなつて、淡暗い感じがした。食堂に這入ると、お父さんと、坊さんが嚴肅な顔をして床の上を歩んで居られた。ハニヤは未だ來て居ない。私は胸をドキつか

せて縁の室の戸の彼方を眺めた。ハニヤは來て呉れるのか知らむ。來なければ祕かに行つて見ようか。

すると間もなく、お父さんと、坊さんは、座に就いて呉々も私共に注意を與へて呉れ、且細々と道德上の事を教へて下さる。私は、パンを噛み、暖ためた酒で喉をつくりながら、少つとも注意しないて話を聞いて居た。

椅子に就くや否や、私の心臓は激しい鼓動を感じて來た。ハニヤの室にバサ／＼と微に物音が聞こえる。扉がガタリと開つたかと思ふと、バニーさんが這入つて來て熱く私の手をおさえる。私はバニーさん故に招いた失望の恨みを晴さんと、その頭に酒をふりかけてやりたかつた。バニーさんは『お若い内にしつかり勉強なすつたがよい』と云ふ。ハニヤは來ない。

しかし苦い杯を乾す事は私には定められて居なかつた。私共がテーブルから立上つた時、眠むたい様な顔はして居たが、晴れらかなな服装をし、髪をふうわりと澎らめて、ハニヤが出て来た。お早うといつて手をとると、其の手は熱い。これはお別れになつて熱發したのではあるまいかと思つて、私はツツと氣をおちつかせて居たが、其は只睡眠中の暖たまりであつた。暫時の後お父さんと坊さんは、ワルソウまで托ける手紙認めに行かれた。セリムは室の中に飛び込んで来た大犬を追つて今しがた外へ出た。残るは私どハニヤばかり。私の目からは涙がはふり落ちて来た。私はハニヤを戀して居る事を自白しやうとは思はなかつたが、只ハニヤさんくゝと情の籠つた言を云つて、接吻してやりたいと思つた。好機會ではある。誰も見て居ないから其れ丈の事ならしてよさを

うなものに、私は其れ丈の勇氣さへ出ず、おづ／＼とハニヤに近寄つて、手を延べて不自然に「ハニヤ」と云つたが、其の聲すら自分ながらいやな聲で、私はその儘後へ退いて黙つて居た。すると、女の方から斯う云ひ出した。

「ほんどに、ヘリン様居なさらないと、どんなに寂しいでせう」

「復活祭には復戻つて来ますよ」と私は低い妙なバス聲で云た。

「でも、復活祭迄随分あるでは御座いませんか」

「直ぐです！」と私は口ごもつた。

忽ちバタ／＼とセリムが駆け込んで来た。其の後にお父さん、坊さん、バニー、下僕達が来る。「橋へおのりなさい、橋へ」といふ聲が私の耳に響いた。玄關へ出て行つたら、父さんと坊さんが

私を抱いて下さつた。いよ／＼ハニヤと別れなければならなくなつた時、私はハニヤを抱き寄せて接吻しなければ堪らなくなつた。其迄の勇氣は出なかつた。「左様なら、ハニヤ」と私は手を差し出して云つたが、心は千々に碎けて、無限の情愛が唇にあらはれる。

其の時ハニヤはほろりとした。私は堪らなくなつたけれど、冷淡な聲で、「めそ／＼泣くものぢや無い」と云つて、櫓の中に座つた。

するとセリムは皆に別れを告げ、ハニヤのところに駆せ寄つて其の両手をどつた。ハニヤは其れを振り放そうとしたけれど、彼は何の遠慮も無く亂暴にも一度、二度と接吻をした。其の時私の動悸の高まつた事、彼奴を張り飛ばしてやりたいと思つた。すると

セリムは接吻して仕舞つて櫓の中に飛び込む。「行け」とお父さんは云はれる。坊さんは十字を切つて私共を祝福して下さる。御者が、「ハツタ、ホー」と馬を呼べば、チャラン／＼と鈴がなる、雪がグツ／＼となる、一行は道へ出た。

『野良犬、盗棒！』と私は心の中で云つた『其の最後の態を見る。汝は女から厭はれたんだ。ハニヤは汝の爲に涙を流したのでは無い其れは汝を嘲つたのだ』

私は毛皮の襟を立て、聲をのんで子供の様に泣いた。セリムが見付けてはならぬと思つて隠れて泣いた。けれど共セリムは何も彼もよく氣附いて、同情して居た。でも初めは何も云はなかつたが間も無くホールリに着くと、セリムは、

『ヘンリック君』と云ふた。

「何だ？」

「君泣き腫らしたのか」

「そんな事、何うでもいしや」

二人共復暫らく黙つて居つたが、稍経つてセリムは復、

「君！」

「何？」

「腫れたんだろふ？」

私は答へなかつた。するとセリムはゾト俯向いたかと思ふと雪を一ぱい掴みとつて、私の帽子をはづし、頭の上に其奴をなで廻して云ふ。

「これで冷へたるふ」

四

私は試験が近まつたので復活祭には歸省しなかつた。お父さんも私が大學の入学試験に及第するのを望んで居られるし、それに又私が休暇中には勉強しないものだと思つて居られるから、一つ喫驚させてやるふといふ氣もあり、且私は學校で教はつた半分丈は忘れて居るので茲に止まつてシツカリ勉強する事にした。そして只學校で學んだものばかりで無く、入学試験の準備ばかりで無く、昨年あたり大學に這入つたといふ書生さんから最も大切だといふものを秘かに教はつた。

これは私にとつて忘れぬ事である。何故かといへば、私のお父さんや、教父のルドビクが骨折つて建設して下さつた思想や想

像や静かな家庭の空氣は此の時皆壞れてしまつたからである。

此の若い書生は何をするにも激烈な男であつた。彼は羅馬史の講義をして聞かせる時、グラツキの改革當時の少數政治の非道を罵つた爲、私の貴族的の自信、うぬぼれは煙の如く消えて仕舞つた。年若き私の先生は深酷なる信仰で教へて呉れた。例へば、これから、いやしくも大學生となつて有爲の地位を得やうと思ふ者は、すべからず一切の偏見を破棄して、只々純正哲學者の熱情を以つて萬事に接しなければならぬといふ様な事である。

そして何時でも彼が意見を述べて云ふには『これは一般の法則だが、おい君何だぜ。十八から二十三歳迄の間に餘り善すぎる男は、きつと馬鹿者か保守黨になつてしまふんだぜ』

彼は大學の教授や大學生以外の人に對して同情を以つて語つた

が、常に其の唇から逃れなかつた理想があつた。私は彼から初めて、モレスコットとブシネルといふ人の居る事を聞かされた。此の二科學者を彼は屢々引照したからである。彼は熱心に近世科學の勝利を説き、盲目的迷信が知る事の出来なかつた大真理の勝利を説き、近代學者が埋没した處から拾ひ上げて、無類の勇氣を以つて世界に擴めた真理の勝利を述べた。

斯ういふ意見を吐いて、彼は鬘れ髪の密生した頭を振つて巻煙草を吸ふ。其の吸ふ事の激しさといつたらない。まるで何本吸ふたやら分らぬ。そして俺は煙を鼻から吹き出すのか、口から吹き出すのか分らない様にして出す。こんな事の出来る者はワルソウに一人だつて居やしないぞ云つて吸つて見せる。それから起ち上つて外套を着るのが常であるが、外套のボタンは半分程は落ちて

居る。「また別な處で小集會があるから急がなければならぬ」と云つて、彼は神秘的な目たゞきをして、セリムも私も、まだ年が若いから此の集會には來てはならないが、暫らくすると、話を聞かなくても分る様になると附け加へた。

斯う云つたらち父さんお母さんほ喜ばれなかつたろふけれど、書生さんにも確に善い處があつた。彼は私共に教へて呉れる事をよく解して居て、しかも科學の眞狂信者だつた。彼は何時も穴のある長靴を穿ち、絲目の見ゆる外套を着、古巢の様な帽子を冠り身には一錢も携へて居なかつたが、貧乏とも思はず、心配不足を更に感じなかつた。彼は科學に對する熱情で生きて居た。身の歡樂などは思つた事も無い。セリムと私は彼を自分達より、づぬけた超人の様に、智慧の大海の様に、無限の重量の様に思つて見て

居た。若し死んでも人を救ふ人があるとするならば彼は即ち其の人だど私共は信じて居た。其の凜々しい天才は自ら之を確信して居た。私共は鳥籠にくつ着いた様に彼の自信にくつ着いて居た。

書生さんは實に知識の眞世界に至る門戸を開いて呉れた。此の新眞理に眩まされてハニヤを懐ふ心は餘り起らなかつた。でも初めはそうで無かつた。ハニヤから手紙が來ると、私の情の祭壇の火は益々燃え上つたが、若い學生の理想の大海に較べると、平靜なる村落世界は私の眼中から消え失せて仕舞つた。ハニヤの姿が全く消え失せたといふではないが淡ぼんやりとした霞に包まれて居た。

セリムは何うだといふに、彼も亦強烈な革新的精神を以つて地上の途をずん／＼歩むだ。併し彼はハニヤの事は去程思つて居な

かつた。私共の宿の向に窓があつて、其の窓側に女學生のヨシアといふのが座つて居るのを見て以來、セリムは其の女を懐ひ初めて、幾日かの間、始終二人は兩方の窓から二つの籠の鳥の様に互に瞋み合ひをして居た。セリムは『此奴だ此奴だ』と何か確然と覺りでも開いたかの様に繰り返すことがあつたが、又間々床の上には横になつて勉強して居ると、本を其の上の投げ棄て、飛び上り、私を捉へ、狂人の様に叫び笑ふ事があつた――

「あゝ、ヨシア、あゝ可愛いなあ！」

「飛んでも無い事になるぞ」と私が云へば彼は、巫戯半分に、

「お前こそだ」と答へて復本を續む。

遂に試験となつた。二人共卒業試験にも、大學の入學試験にも見事及第した。試験が終へると鳥の様に自由になつたが、猶三日

間ワルソウに滞在した。其の間に私共は大學の正服をあつらへた。それから書生さんが是非共お祝ひしたいと云ふので、連れられて酒屋へ行つた。

三人で二瓶傾けるとセリムも私も頭がクル／＼廻つて來た。書生さんの顔が何故か親しくなると、何やら胸がヒラリとして、不思議な程なづかしくなり、互に親しく心を打明けた。

「君達もいよ／＼これから一人前の男だよ」と書生が云ひ出した。「世界は君等の前に開展して居る。娯樂をやるもよかるよ。散財をやるもよかるよ。戀するもよかるよ。然しね、斯ういふ事は馬鹿氣た事なんだよ。思想の無い淺薄な人生は只生きて、骨折つて努力するばかりで馬鹿げた事だよ。併し、賢く生き、合理的に生き、賢明な努力をしやうとならば、事物を嚴肅に見なければな

らぬ。僕は萬事嚴肅な態度で見て居る。僕は決して自分に出來ない事を信じない。君達もそうでなければいけない。世間には色々な生活や思想の道がある。で人は紛糾錯雜した此の世界にありて何ういふ頭には鬼が附かないか辨へて居なければならぬ。俺なんか科學で立つて居る。だから大丈夫だ。科學が無かつたら、僕などは自殺する處だよ。若し破産でもして見玉へ自殺するにきまつてる。けれ共俺の信ずる基礎の上に立つて居れば破産などする事は無い。君等は何事にでも欺される。戀に陥つては女から欺され、宗教に這入つては、疑惑が生ずる。そして何物も得る事が出來ない。でね、云つて聞かせるが、眞實なものを信ずるに膽せぬ君等の事だからよく解るだろふ。凡ての基礎は科學でなくてはならぬ。科學は俺の提琴の弓だ。これさへあれば運命が開拓される。破れ

靴を穿つて出かけ、物置小屋の中に寝ても平然たるものだ。分つたかい』

『科學の力は偉大なものだね』とセリムは叫んだが其の眼は燃ゆる石炭の様に輝いて居た。

書生はふさ／＼と前に垂れ下つた髪を後ろにはねやつて、杯を飲み乾し、煙草を吸ひ込んで、偉い勢で鼻の穴から吹き出して續けた——『科學の外にね——おいセリム君は酔ばらつたのか——科學の外に哲學といふものがあるよ。理想があるよ。併し、哲學特に理想は俺の大禁物だ。理想哲學なんて當ずつぼうだ。眞理を追ふのは、ポチと同じで自分の尾を追ふのと同じなんだ。俺なんざ、當ずつぼうなどして見る氣にやなれぬ。俺は事實を愛する。君等は水から牛乳をとる事が出來るか。理想なんて、水から牛乳

をどるのと同じものだ』

吾々は復杯を飲み乾した。額が燃ゆる様になつて来た。酒屋の暗い室が一層暗くなる。食卓の蠟燭は微に燃ゆる。煙草の煙は壁に貼つてある繪を隠す。窓外の庭には乞食爺が哀れな歌をうたつて居る。『清い、天の使………』

歌の間に淋しい樂器を掻きならす。不思議な感じが私の胸に満ちた。私は主人の云ふ事を信じたが、まだ彼は人生を充實せしむることを云つて居ない様な氣がした。何かの缺損がある。何やら分らぬ一種の悲哀が私の胸をかすめた。酒と想像と一時の激情にあほられて私は低い聲で云ふた。

『何で戀を止むる事が出来ようか？』

セリムは歌ひ初めた。

『不定な女を信ずるとは、

さても愚かな男かな』

書生は何やち意味ありげに私を見詰めた。其の表情は私には何やら分らないものだつたが、彼は頭を振つて云ふた——『呵々々お前さんは餘り感情的だからよくない。セリム君の方がお前さんよりは餘程立身するぞよ。下らないなあ。用心しろよ、用心しろよ。でないど女難に遭つて生命を奪はれるぞ。女！女！（と云つて何時もの様に彼は目たしきする）『俺は女といふ物をいくら知つて居る。どんなものだど氣易く説明は出来ないが、お前が指一本でも女魔に觸れて見ろよ、魔はお前の手をひつたくつて仕舞ふのだ。女！戀！人間の一切の不幸は此の内にあるものだ。俺の様にして身を楽しませるのならよいが、女に生命を入れてはならぬ

理性を把持して、虚偽に嘯されてはならぬ。でも、女は居ない方がよいと云ふんぢや無い。其塵事は少つとも思はない。思はない處か、好きだ、好きだけ共。空想の奴隷にはならぬ。一例を擧ぐれば、俺がロラといふ娘と初戀した時だ。まるでロラの着物が神聖なものであつたかの様に思はれてならなかつた。汚ないキヤラコの着物がさ。そして俺は其の女に羽根でもはえて居る様な氣で居た。まるで馬鹿げた事だつた。併し誰だつてそうだ。ふぬけた事をして居つて後から氣が附いて下らなかつたと思ふんだよ」

「併し、男は女の必要を感じますぜ。あなただつてそうでせう」と私は切り出した。

微かな笑が彼の唇にほの見えた。

「必要は何としてとも滿されるよ」と彼は答へた「俺は俺の方法

でやる。只俺の主張するのは、下らないものを偉いものゝ様に思つてはならぬと云ふのだ。俺は正氣だ。けれ共正氣でない奴は女故に自分の生命を破壊したり、絲の様に自己を結びからめて仕舞ふ。だから俺は其塵事してはならぬと云ふのだ。俺の戀よりも、もつと高尚な大切なものがあると思ふ。戀といふものは些細なものだ。いゝかい。大切なのは正氣だ、正氣に勝るものは無い」すると、透構はず、

「女萬歳！」とセリムは突然叫び出した。

「うむ。女といふものは玩具だよ。餘り眞面目になつて接しちや駄目だ」と書生は云ふ。

「ヨシア萬歳」と私はセリムのコップに觸れて叫んだ。
「待て。今度は俺の番だ」とセリムは答へた「ハニヤ萬歳。あ互

様だ』

血が私の中に躍り初めた。火花が私の眼に散る。

『黙れい、セリム』と私は叫んだ『這麼處で名を云つて貰つてはならぬ』

と云つて私はコップを床の上に投げつけ、微塵に打ち砕いた。

『おい狂ひ出したのかい』と書生が口を入れる。

私は狂氣したのではなかつたが、むら／＼と憤怒の炎に燃え上つて居た。書生の話には嘲弄的に面白半分に分分に耳を傾けて居たが、純潔な處女の名を這麼汚ない煙と、穀徳利と、コルクと犬狼見た様な話の中で聞かされるとは忍びないことであつた。私は何だかハニヤが汚悪淫亂の名の下に嘲られる様な氣がして、激怒の餘り自制の力を失つた。

セリムは喫驚して私の顔を見上げたが、直ち彼の顔は暗くなつて、眼は輝き、額には青筋が浮き出で、鞭鞭人其の儘の顔となつた。

『俺の云ひたい事を云はせまいとするのか？』と彼は喘ぐ息をついて、ちぎれ／＼に深い聲で叫んだ。

其の刹那書生が二人の間に這入つた。

『大學の正服を着て何う云ふ事だ君達は。小學生徒の様につかみ合ひでもするのか、耳でも引張り合ふのか？コップでなぶり合ひする哲學者。恥かしくは思はないか？君達は世界の問題に觸れなければならぬ人々ではないか。恥かしいとは思はないか。思想の争から、握り拳の喧嘩になるとは何たる事だ。止せ。今日は君達の大學入學祝ひをして上げるんぢやないか。仲直りしないなら君

等は眞實に阿呆だよ。まあ一滴も残さず飲んで呉れよ』
私共は仲直りした。セリムは私よりもつと飲んで居つたけれ共
先に仲直りして、

『許して呉れね。俺がわるかつたから』と優しく云ひ出した。

二人は眞情から抱き合ひ、お祝ひの爲めコップの底まで飲みほした。すると書生は低い聲でお詫ひをうたつて呉れた。穴庫のガラス窓から、商人共が伺き込む。空は早暗くなつて居る。私は酔つぱらつて仕舞つた。歡喜は早絶頂に達して、際々下りがけになつて居た。先づ黙り込んで冥想に陥つたのは主人であつたが、暫らく経つと頭をあげて斯う云つた。

『斯うして居れば面白いが、實際人生は下らないものだ。斯うして居れば胡麻化す事も出来るが、人間の魂の眞相は胡麻化されな

い。明日も亦今日と同じく、貧乏で、四つ壁に取り巻かれ、乾草置場の臭を嗅ぎ、破れ靴を穿いて歩るかなければならぬ有様だ。苦勞に苦勞を重ねて、何の楽しみも無い。人は一生懸命自己を欺いて居る。そして後には死んで仕舞ふのだ——去様なら』

斯う云つて彼は破れ帽子を被り、附いても居ないボタンを箝めやうとして手をもちく／＼させ、巻煙草に火を附け、手を振つて云ふた——

『僕は何も持たぬから、君達が拂つて呉れ玉へ。其ちや御機嫌やう。君達が僕を忘れやうと忘れまいと僕は平氣だ。僕は感情的でないからなあ。君達、御機嫌やうして居玉へ——』

感情的では無いと云ふたものゝ、彼が最後の言葉は頗る情緒的の低い聲であつた。哀れな此の男は戀を要求したのだつた。そし

て人と同じく彼も亦戀を得た。けれ共幼き時から不幸續きで、貧苦と世間の冷遇とは彼を消極的にして仕舞つた。彼は本來高慢で熱心であつたけれ共、人に棄てらるゝ事を恐れて心から人に頼り過ぎた。

私共は一種の悲痛をあびせかけられて暫らく静として居た。是は何か不安の前兆であつたるふ。再び私共は彼に遭はなかつた。彼自らも私共も久しい間彼の胸に逃れられない致命傷の要素がくつ附いて居た事を知らなかつた。貧乏と過勞と熱烈な讀書と不眠と飢餓とは危儉へ彼を急がせたのだ。

秋、十月の上旬、私共の教師なる書生さんは死んで仕舞つた。休暇中であつたから野邊送りして呉れた友も少なかつた。彼の貧乏なお母さんは、ドミニシヤン教會堂の蠟燭や聖像に包まれて、

息子の爲に聲をあげて泣いた。お母さんは生前の息子を度々理解する事が出来なかつた。其でも、やつぱり母親だもの。

五

さて、其の祝ひの翌日、ホーレリなるミルザの内から馬を連れて迎への者が來た。私共は其の翌日出立する事にした。馬に乗つて二日間行かなければならぬから夜明けに出立をする。石造の宿はまだ秘つそりとして居つたが、向いの家には、ヨシアの顔がジレニヤム草や、黄の董やフクシヤ草に包まれた窓側に輝いて居た。セリムは旅囊を肩にし、學生帽を冠つて、歸省の意を知らせる爲めに窓側に立つた。すると、女は、ジレニヤム草の中から悲しい瞳をして返辭する。けれ共セリムが自分の心臓の上に一方の手を

あて、一方の手で接吻を送ると、花の間の顔は眞赤になつて、眞暗な室に引き込んで仕舞つた。

庭の鋪石の上には強い四頭の馬に曳かれた車がガタ／＼いつた。もう別れを告げて、車に乗るべき時である。けれ共セリムは何かもつと見やうと思つて窓ぎわに辛抱よく待つて居た。けれ共希望は彼を欺いた。窓は明け放しにされた儘であつた。それから私共は下へおりて、向への家の暗い入口を通ると、石段の上に、白い二つの靴下と、栗色の着物と、稍俯向いた胸と、手のかげになつた二つの眼が見えた。二つの眼が暗闇から日の光の方を望んで居る。

セリムは急に入口に駆け寄つた。私は車に乗つて各側にくつ附いて座を占めると、何かの口語と、接吻の様な音が聞へた。する

ど、セリムは半分は笑ひ、半分は胸を動かして、赤面して車へ這入り私の側に座つた。御者が馬に鞭を加へる。セリムと私は覺えず窓の方を見ると、ヨシアの顔はまだ花の中にあつた。ヨシアは白のハンケチを握つた手を前に差し出して居る。今一瞬でお分れた。車はゴ／＼とヨシアの美しい面影を残して町へと轉んで行つた。

早朝の事である。町は眠つて居る。曉の紅の光が眠れる家々の窓に映じて輝いて居た。明けの鳥が一羽彼方此方へと飛び廻るのだ、誰か一人此の寂寞を破つて來る者があるばかり、何處の町にもまだ巡査は寢て居る。何處からか町へ來る荷事の音が聞へる。其れ迄は寂として音なく、夏の朝に有り勝な清涼な微風が音も無く打戦いで居た。

四頭の馬に曳かれた軽快な車は鋪石に沿ふて、絲で引つ張る胡挑殻の様に跳んで行つた。と直ち河の冷やりとした息が顔を圍んで、橋がガタ／＼と鳴る。半時間経つと、廣い野や、麥畑や、森を越へて車は轉ぶ。

私共は胸一ぱい爽かな朝の空気を思ふ存分に吸ひ込み、地方の景色を見て喜んだ。大地は今や眠りから醒め、眞珠の様な露は木の葉木の葉に滴り、小麥の穂末穂末に輝いて居る。生桓には小鳥の群が美はしい日を迎へて賑かに囀りながら喜ばしげに躍り廻つて居る。森や草地は、幕を引きあけて現はるゝ兵士の如く、朝霧の中から出て来る。此處彼處の草地の上に、水が輝やいて、黄金色の水百合の花の上を鶴が涉つて居る。赤い煙が村の草屋の煙突から眞直に立昂る。微風が黄色に實つた小麥を波打たせて、夜

の濕りを打拂ふ。喜びは何處にも降り濺いで居る。萬物悉く日醒めて、生き上りつゝ、一望の平地が歌をうたつて居る——

夜は明けぬ。

陸の上に、

海の上に、

其の時吾々の心は何うであつたるふ。若い時斯ういふ不思議な夏の朝歸省した覺えのある人は想像が出来るだるふ。見よ、少年の時代と服従的學校生活は己に過去のものとなつた。青年の時代は今吾が前にある。千草の花が咲き亂れた廣茫たる草原の如くに吾が前に横つて居る。奇怪なる未見の地——其處に私共は吉兆の豫想を感じつゝ、若鷺の様に翼を擴げて旅立つのだ。地上のあらゆる寶の中、最も大なるものは青春である。しかも吾々は未だ壹

錢も其の豊富な寶を費さないで持つて居るのだ。

晝夜兼行で走り續けて二日目の夕方森を出脱けるとホーレリの村が見えた。村が見えたと云ふよりは回々教寺院の尖つた棟が夕日の光を浴びて輝いて居るのが見えた。直ちに堤の上に出た。兩側には柳と水蠟樹の並木があつて、堤の下なる兩側は大きい池で、磨穀機と鋸輪機とがある。日影と岸に沿つて茂つた雑草の温りを受けて鳴く蛙の眠むたい聲が聞へた。日は將に没せむとして居る。塵霧の中に隠れて居た家畜や羊の群は此の堤を通して彼方の百姓屋へと歸路に就いて居る。大鎌小鎌を手にした人々や熊手を肩にした人々の群が此處彼處「ダンナ、オイ、ダンナ」と歌ひながら家路を急いで居る。是等の正直な労働者達は車を止めて、セリムの手に接吻して暖かに彼を歓迎した。

日はいよ／＼没せむとして蘆の葉かげに半ば隠れた。只金色の大きな光が一條池の真ん中に輝いて居るばかり。岸の木立は鏡の様な水面を覗いて居る。稍右に曲ると間も無く、リンデンや白楊や樅やアシユツリの間にホーレリの家の白壁が輝いた。庭内には下男どもを呼ぶ鈴の音が響いて居る。寺の屋根の上からミュージンの物思はしげな聲がする。

「星の夜が天から地に下る。アラーは大なる哉」(ミュージンとは高樓の屋根から祈禱の時間を報ずる回教の僧) 屋根の上の木梢の巢の中に伊太利中世の珍らしい花瓶の様な姿した鶴が立つて、坊さんの聲に合わせて居るのであるか、矢の様な嘴を空に擧げては胸の中におしこめて、さも歓迎でもしてる様に頭を振つてガラガラと鳴く。

私はセリムを見た。其の眼には涙が一ぱいだつた。其の顔は彼獨得の比類無い美に輝いて居た。

入口の窓側にはミルザの爺さんが座つて、煙管から青煙が立昇つて居る。彼は其の楽しい風景の上に動いて居る平穩な勤勉な人々を面白げに眺めて居たのだ。彼は息子を見ると急に立ち上つて来て抱きあげて仲々放さない。厳しい人だけれど、息子に勝つて可愛いものは無いといふのらしい。彼は先づ試験の事を尋ねて復抱き上げた。下女下男達が幾人もなく出迎へに来る。犬が嬉しげに彼を取り圍んで飛び上る。馴らした唯狼が入口から飛んで来た。「ルザ！ルザ！」と云へば、大きな其の前足をセリムの肩へ上げて、顔を甜め、狂氣の様に彼の身の廻りを走せ、喜びの餘り怖ろしい齒をむき出してクウクウと唸る。

其から私共は食堂に這入つた。私は珍らしくて堪らず室中を見廻す。壁にはセリムの先祖の肖像や、船長の肖像や、小旗が懸つて居る。輕騎兵の大隊長ミルザは不吉な歪んだ眼で私を見るのであるが、サーベルで切られた跡のある顔はもつと見苦しく、ほんとは怖わかつた。皆の内ではセリムのお父さんが一番變つて居る。髪は灰色で、鬚は殆んど眞白で、鞭鞭人其のまゝのタイプが明かに現はれて居る。あゝ父と子の何たる相違ぞ、父は骨の凸凹した嚴めしい怖ろしい顔をして居るが、子供は清新な悦ばしい花の様な果た、天使の様な顔を持って居る。ところが其の父が慈愛の眼でセリムを見、且つセリムの全舉動に氣をつけて居る様は描き出す事が出来ない程柔かな喜びを現はして居た。

二人を遮ぎるまいと思つて私は片隅にじつとして居たが、父さ

んは純ボーランドの貴族の様に懇ろに私を抱いて是非泊つて行く様にと云はれた。私は急いで居るから泊りたくはなかつた。只晚餐のお世話になつたばかり。

私は其の夜遅くホーレリを出立した。故郷近くに着くと、もう十二時になつたのだるふ、眩月が空に懸つた。家々の窓には火影が見えない。森の近くの炭焼きの火は遠くから見えた。犬が伏屋の門に吠えへ居た。内の家の上に杖を擡げたリンデンの木の下路は真暗で何も見えなかつた。誰やら低い聲で歌唄つて通つたが誰たつたやら分らなかつた。入口に着いたが真暗である。まだ皆寝て居る様子だが、犬共は方々から走せ集つて、喜び躍つて馬車の廻りに吠える。私は飛びおりて戸を叩いたが、誰にも聞えぬらしい。暫らくするとガラス窓に燈火がちら／＼してフラネクらしい

眠つたい聲がした。

『誰でござす?』

答辭すると、フラネクは戸を開けて、私の手に接吻した。

『皆達者かい?』

『へい皆様達者でござすが、御主人様は町さお出でになりました。夜が明けたらお飯りになります。』

フラネクは私を食堂に連れて行て、下げランプに火を點じて、茶をわかしに行つた。暫らく一人で考へて居ると、心は激しく動いて来る。と間もなく教父ルドヴィクが法衣を来て大急ぎでお出になる。パニーさんも白衣を着て來られた。一ヶ月前休暇で歸省したカジオも來た。皆が暖かい親切な心で歓迎して呉れて、私の大きくなつたのを賞める。教父は私が男らしく大きくなつたと云

ひ、パニーさんは私が愛らしくなつたと云はれる。

教父は可愛想に怯々と試験は何うだつたのとか、卒業證書は何うだつたのとか尋ねられた。及第したと云へば、私を抱いて、よい兒だと云つて涙をこぼされる。すると今度は寢室から小さな素足の音がバタ／＼響いて来て二人の小さな妹が寢巻の儘駆け込んで、

「兄ちゃんが出来なかつたよ。兄ちゃんが来てなかつたよ」と繰り返して、私の膝の上にあがつて来た。遠慮もせず私の頸になり下つて頬に唇をすりつける。暫らくして私はおづ／＼とハニヤは何うして居るか尋ねた。

「はあ、大變大きくおなりですよ」とパニーさんが答へた。「もう直ぐお出でなさるでせう。今着物をお占しになつて居ます」

五分間計り経つてハニヤが来た。私は眼をあげると、あのスラリと疲れた十六歳の娘が半ヶ年に變つた事。私の前には殆んど成熟した一人の婦人が立つて居る。其の姿は驚く程丸く奇麗になつて居る。優しくはあるが、顔色は實に健かそうである。頬は曙の色の様に赤く、薔薇の花の咲きかゝつた様に、健康で若々しくて新清美妙なものが彼女から射出して居る。ハニヤは不思議な大きな眼で私を見守つて居つたが、其の口もとに漂ふて居つた笑で私から受けた驚喜の念や印象のある事が察せられた。お互に眺めて感ずる奇異な心の中には青年と處女との一種説き難い恥しさが隠れて居た。子供らしい兄と妹との單純な心持は最早何處へやら森の中へ消えて仕舞つて再び歸らない。

其の微笑と静かな喜びとを眼に湛たハニヤの美しかつた事よ！

ハニヤ

テーブルの上に掛つて居るランプの光は彼女の美しい髪の上に洩れて居た。黒い外衣を着て又其の上は何やら黒いものを着て居る。其の黒いのを白いネクタイの下の胸の處でおさへて居る。きつと嬉しくて堪らず惶惶と着たのたるふ。睡眠中の暖まりが感ぜられる。挨拶の爲、私は其の手に觸れると、暖かで、柔らかで縞子の様だ。私は全身を貫く様な快い身慄ひを感じた。ハニヤは身體の變つた様に心も變つて居た。別れた時には半下婢の單純な女であつたが、今や若い貴婦人で、高尚な表情、優美な舉動を以つて、尊い血統に生れ、深宮に育つた様な風情を止て居る。彼女は道徳的に智的に目が醒めて、魂が瞳から輝き出で、居る。何う見ても、もう子供では無い。何ともいへぬ其の微笑、無邪氣な媚の中に彼の女の心が讀まれ、且又『お互に、まあ大變變りました』

と思ふ女の心持が察せられた。私はハニヤに何やらずつと私より勝れたものゝある事を知つた。私はハニヤより學問丈はずつとし居るけれ共、生命、理解力等に於てはズツとハニヤより劣つて居ると思つた。ハニヤには私よりもつと自由な處がある。保護者として又主人の息子としての私の威嚴は何處へやら森の中に行つて仕舞つた。私は歸路つく、甚麼風にしてハニヤに會つたらよかるふ、何う云つたらよかるふ、何んな風に親切な、又なづかしい態度をとつたらよかるふかど考へて來たが、其は皆駄目になつて仕舞つた。私が彼女に對して親切なよい心を起したと云ふよりは、彼女の方から私に親切なよい心を起して呉れた。何ういふわけで這麼感じがするのか初めの程は分らなかつたけれ共、遂には其の理を感じ附いた。私はハニヤに何を學んで居つたか、何う

ハニヤ

いふ事を覺えたか、何うして時を過したか、バニリーさんや坊さんは彼女にとつて、満足であつたかを尋ねやうとして居つたけれ共、反つて彼女の方が口もとに笑をふくめて、私が何事をして居つたのか、何を覺えたのか、之から先何事をしやうとするのかと尋ねる様な面持をして居る。何も彼も全く思つたのと反對である。簡単に云へば私共の關係は正反對に變化して居るのであつた。

一時間程話をした後、私共は復各々床に就いた。私は稍眠ひたいやら、不思議な氣がするやら、何やら欺かれた様な氣鬱を感じて自分の室に行つた、けれ共種々な印象を受けて居る。愛は再び起つて、燃ゆる家屋の隙間から洩れ出づる焰の如く突き出で、來て、是等の印象を全く蔽ひ被ふせた。すると、優しいふうわりとしたなづかしいハニヤの姿が睡眠の暖つたまりに包まれ、白い手

で、そこ／＼に着た着物の胸をおさへ、垂げ髪の儘現はれて、私の想像をそゝる。私は彼女の姿を描いて眠つた。

六

翌朝私は早く起きて庭に走り出た。美しい朝で露が深く花の薫が空に漲つて居た。私は屹度ハニヤに會へる事と思つてホームビームの林に大急ぎで行つたけれ共、其は只早合點であつた。ハニヤは其處に居なかつたばかりか影さへ見えなかつた。食後私はハニヤと室に居残つて、一緒に庭を散歩なさらぬかと尋ねると、ハニヤは嬉しげに承知して、走つて室に行つたが、顔も目も蔭れ相な大きな麥藁帽を冠り、手に傘を持つていそ／＼出て來た。帽子

の下から巫戯半分ふげはんぶんに此方こなたを見て笑わらひながら、

『一寸いちゆづご覽遊らんあそばせ、随分ずぶん變りかはりましたでせう』といはんばかり。

二人ふたりは一緒に花園はなぞのへ行いつた。それからホームピーム林りんの方ほうへ轉まじて、行く行く、何麼風なんなふうに話はなしかけたらよかるふかど考かんがへたけれ共とも一向言葉かうごが出でない。それにハニヤは私わたしよりもつと巧たくみに先まに云いひ出し相あに見みえて、私わたしのまごくして居ゐるのを面白おもしろがつて居ゐるらしい。私は黙だまつて、途端みちまたの花はなを鞭むちで叩たたき落おしながら歩あるいた。すると、ハニヤが急に笑わらひ出だして、

『あなた。花はなが悪戯いたづらしました？』と鞭むちを捉とらへて云いふた。

『花はなに罪つみは無いが、何話なにはなしてよいやら分わからないから。あなたは大變たいへん變りかはりましたね。本當ほんたうに變りかはりましたよ！』

『左様さやうで御座ございますよ。でも變かはつては悪いので御座ございますか』

『悪わるくはない』と私は稍や悲かなしくなつて答こたへた。『でも、元の貴嬢あなたと今の貴嬢あなたが何なんだか違ちがふ様な氣きがしてならない。私の記憶おぼえの中うち、心こころの中うちにある貴嬢あなたは妹いもうとの様ようだのに』

『だから、今の私わたしは他人たにんの様ようでせうね。そうなんでせう？』と低い聲こゑではハニヤ尋たづねた。

『何なにうして其麼事なんなことを考かんがへなさるの？』

『あなたは兄弟きょうだいの様ような感じかんじを、心こころの中うちにお探さがしになつて、其それがお解わかりにならないのでせう』

『いや、私は昔むかしの貴嬢あなたを心こころの中うちに探さがそうどはしませぬ。今の貴嬢あなたの中うちに昔むかしの貴嬢あなたを探さがそうとするのです。私の心こころは——』

『あなたのお心こころは』とハニヤは愉快相ゆかいさうに遮さえぎる『何なにうなつたか當あてゝ見みませうか。あなたワルソウの何處どこかに可愛かわいい、人と居ゐらし

たでせう。其で立派に當りましたわ」

私はハニヤの眼を深く覗いた。ハニヤは私に謎をかけて居るらしい、昨日私に與へた印象を解いて居るのやら分らなかつたが、稍手激く私に當つて居る事は確かだ。私は急に反抗心を起したが、茲は愉快な顔をしなければならぬ處だと思つて、感情をおさへて

「其が本當だつたら何うしますか？」と云つた。

一種不快な驚きの表情がハニヤの顔に見へた。

「其が本當でしたら、變つたのは私ではなくて、あなたですわ」
ハニヤは眉を擡めて、私を見ながら暫らく黙つて居た。其の言葉は深く私の心を貫徹した。私は嬉しい情緒を無理に隠して思ふた。「俺が他の女を愛するならば、變つたのは俺だ」と云ふのだから實際變つたのは彼女では無い」

併し矢つ張、變つたのは私でなくて、彼女であつた。六ヶ月前迄は何も分らなかつた乙女が今や暗誦でもして居る様に自由に巧みに語るのである。其の心の發達して柔らかなつた事、女といふものは不思議なものだ。夕に寝る時は子供の様だが、朝眼の覺むる時は別世界の感情思想を持つて居る。敏捷な、頭のよい、感じの強い性質を持つて居るハニヤは多分秘かに讀書した爲か、年はまだ十六を越したばかりでまるが、なるで別世界の人間になつて居る。

其から二人は肩を揃へて黙つた儘歩いて居ると、先づハニヤが話し出す。

「其ではあなたは戀愛なさつて被居るのですね」

「かも知れない」と私は笑つて云ふた。

「其ぢやあなたはワルソウに歸りたく思つて被居るでせう」
「いゝえ。僕は茲にさへ居らるれば、之にました喜はない」

ハニヤに急に私を見つめた。何か云ひたいのだけれど云ひ得ないで居る。けれ共暫らくすると、一人合點した様に洋傘で裾を叩いて云ふやう。

「私は本當に子供ですわ」

「何うして？」

「其麼事何うでもよいではありませんか。まあ此のベンチに掛けて別な事でも話ませう。よい景色ぢや御坐いませんか？」と唇に愛らしい笑をこぼして云ふ。

ハニヤは大きなリンデン樹の下の杣から程遠からぬベンチに腰掛けた。其處からは濕つばい池と、彼岸の森を眺めて誠に景色が

よい。ハニヤは傘で「あれぞ覽」と景色をさして見せたが、私は美しい景色は好きだけれ共、一向其麼ものを見る氣にならなかつた。

「くつきりと木影が水に映つて居るぢやありませんか？」

「貴嬢は藝術家ですね」と私は水も木も見ないで云ふた。

「私はね、ルードヅクさんから寫生を教はつて居ますのよ。ご留守中澤山稽古しましたの。あらつ——あなた、何なさいまして？怒つて居らつしやるの？」

「怒るものですか。併しね、貴嬢は私の間を避けやうとして居ますね。だから變な氣がするのです。お互に昔の様に心を打明けて信實には語らないで、隠し合ひをして居る様な氣がします。そうは思ひなさないの。私は其が不愉快だ」

ハニヤは私に両手を投げかけた。私は其の手を緊と壓へると胸が戦慄ぐ。私は急に俯向いて其の手に接吻した。保護者の様な氣持でしたのでは無い。それつきり二人は何うしてよいやら分らなくなつた。ハニヤも私も、首の下から眞赤になつて、黙り込んだ儘、何う云ふて信實を現はしてよいやら分らなかつた。ハニヤは私の顔を見る。私も見返す。そして顔は猶赤くなる。二人は並んで人形の様にジツと腰かけて居た。私の心臓は激しくうつ。其の時の氣持と云つたららない。何だか私の首を捉へてハニヤの足下に投げつける様な力を感じるかと思へば、何やら髪を引つ張つて其うはならぬと叫ぶ力を感じた。すると、ハニヤは急に立ち上つて惶惶た聲で、

「私、歸らなくてはなりません。バニーさんからお稽古して頂く

時間です。もう十一時になります』といふた。

私共は復黙つて、元來た道を通つて歸つた。行々鞭で、路傍の草花を叩き落したけれ共、今度はハニヤは何とも云はなかつた。

『昔の關係は美化して歸つて來た。其には少しも疑はない。エスとマリヤ！其は私共の身の上だ』と私は思ふた。

丁度其の時坊さんが來て、事務を辨じて貰いたいと云はれた。途々坊さんは事件に就て、様々と饒舌つたが、私はウム／＼と返事しながら耳には少しも這入らなかつた。

休暇で歸つて居た私の弟のカジオは、始終野外に出て、馬を引つ張り出したり、森の中を歩いたり、獵に出かけたり、馬に乗つたり、ボートに乗つたりして遊んで居つたが、丁度其の時、種馬農場の方から小馬に乗つて、畑の方へと出かけて居た。彼は

私共を見るとき、栗の實の落ちて居る路をカバ／＼と駆けて来て、
「綺麗な馬でせう」とて賞めて呉れどいはむばかり。そして馬か
らひらりと飛びおりて、私共と一緒に歩いた。それから私共は
厩に行つたり、牛小屋に行つたり、ほつ立小屋に行つたりして畑
に出やうとすると、お父さんが歸られたといふ知らせを受けたの
で、皆宅へ歸つた。

お父さんは昔よりもつと暖かに私を待遇して下さる。試験が出
来たといふ事をお聞きになると、私の肩に手をあて、これから
もう大人だねと仰つしやる。私に對する態度がずつとお變りにな
つたのである。其からお父さんは家事政策の面白い事を話して下
さる。隣村の土地を買はふと思つて居るが、何うだろふねなど、
私の意見を尋ねなされる。お父さんは私を喜び、又私の學問の進歩

を本當に喜んで居られる。特に私が教授から書いて貰つた證明書
を見せると父たるの高慢がほの見えた。暫らくすると私は、お父
さんが私の品性や思想の如何や、名譽心を試みられて居るのに氣
が附いた。私の哲學上、社會上の思想は全くお父さんのに違つて
居るけれ共、私は決して洩らさなかつた。其の他の事に於てはお
父さんと違はなかつた。だからお父さんの獅子の様に嚴めしい顔
は何時にもなく輝いて來た。當日お父さんは様々の物を下さつた。
第一にピストル。其れはお父さんが遂此の頃バン、ゾルど決闘を
されたし、軍隊に居られた若い頃も決闘をされたとかで、相手の
名が彫り込んである。其から東洋産の立派な馬を下さつた。其か
ら先祖代々受嗣いで來た古刀を下さつた。其の柄には寶石が這入
つて居る。ダマスコ製の廣い其の刀身は、剛鐵と黄金とを交せて

鍛つたもので、聖母の肖像が描かれ「エス、マリヤ！」といふ字が刻んである。此のサーベルは吾が家の最も大切な寶物で、切れば鐵をも容易に斷つといふ程のものであるから、數年の間カジオと私が欲しがつて居つたものである。お父さんは其のサーベルを見せて、サラリと鞘から脱いで、振り廻すと、空が嘯いて、寒い光が室に閃めいた。其からお父さんは刀で私の頭の上に十字を切つて、刀身の聖母の像に接吻して私の手に譲りながら云はれた。「お前も其丈の腕があれば、耻しくない。これを渡してあげよう。」

とこころへカジオがやつて来て、大喜びでサーベルを取り上げる。未だ十五歳ではあるが度つばづれの腕力家なる彼はビュー／＼と其を打ち振り廻した。劍道の達人も及ばない程の手ぎわだ。お父さんは其を見て満足の爲體で、

「ははあ、巧くなつたなあ。お前はカジオに勝てるかね。どうだ」と仰しやつた。

「勝てますとも。僕は友人の誰とやつても、唯一人を除いては、誰にも負けました事はありません」

「其の一人とは誰だ」

「セリムです」

お父さんは濼い顔をなさつた。

「セリムだど。お前はもつと強くならなければならぬ」

「處がお父さん。一人の外といふのは其いふ理ぢやありません。セリムと私とは一度だつて勝負をやつた事があります」

「あは、さうかい！」

中食後私共は葡萄の蔓の匍ひ上つた廣玄關に腰かけて休んで居

た。玄關からは前面の廣い庭が見える。リンデン樹で縁どられた木の下路が遙かに見える。パニーさんは祭壇蔽を縫ふて居られた。お父さんと坊さんは煙草を吸つて、黒珈琲を飲んで居られた。カジョは玄關の前で燕子の飛ぶのを追つかけて射るふとして居たが、お父さんは「おい、おい止せ止せ」と云はれて居た。ハニヤと私は、私が持つて歸省した繪を見て居たが、私には繪は少つとも目に這入らない、只時々私はハニヤを瞥見するのを人から見出されない爲にとて繪を擴げて居た。

「ハニヤを何う思ふかい？ 見つともない女かね？」とお父さんが滑稽的にハニヤを見て云はれた。

私は熱心に繪を見ながら、

「いゝえ。でも大きくなつて悉皆變りましたよ」と答へた。

「ヘンリック様はね、大變變つたなんて、さつきもお笑ひなさつたんですよ」

とハニヤは何の耻しさもなく云ふた。

お父さんの前で、よくも大膽に云ふものだと思つて私は不思議だつた。

「大きいとか、美しいとかは別問題として、ハニヤは大變物覺えが早い相だ。パニーさんに聞いてご覧、大變早くフランス語を覺えた相な」と坊さんが云はれた。

坊さんは、仲々名高いものだ。永い年月パニーさんと同じ家にあるながら、しかも高等の教育を受けた人でありながら、少つともフランス語を知らない。習つても覺へない相だ。可愛相に坊さんは、フランス語を知らない。其で居て、フランス語は高等教育

に缺く可からざるものだと思つて居られる。

「ハニヤさんはよく覺えるし、喜んで稽古なされるが、然しね……」
とバニーさんが云はれた。

「あら、先生。私何か欠點がありましたか？」とハニヤは手を合せ
て叫んだ。

「ご自分の欠點を云つてご覧」
と復バニーさんは云ふ。「隙さへあれば、ハニヤさんはね、直ぐと小説をお読みになるんですよ。そして床に就いて蠟燭も消さないで遅くまで読んで居らしやるのよ」
「其は悪い。だけれど、先生がして見せるからだろよ」
お父さんは機嫌のよい時バニーを擁抱ふ事が好きだから、斯ういはれた。
「ご免なさい。私にもう四十五歳ですよ」
とバニクさんは云ふた。
「おや、私、何か其慶事云ひましたか？」
とお父さんは知らぬ顔に

云はれる。

「あら、随分ですわ」

「いや私、何慶事か知らないが、若しもハニヤが何處からか小説本を持つて來ますなら、其は圖書室から持つて來るのぢやない筈。ルドビクさんがちやんと其には鍵をしてあられるから。だから罪は先生の上に着るわけ」

事實、バニーさんは子供の時から小説を読み續けたものである。読んで情が熱すると、きつとハニヤに読んで聞かせたに相違ない。そこでお父さんが戯談半分に云はれた言の内には確かな事實が隠れて居た。お父さんはわざと其を確かめやうとなさつたのだ。

「彼處から誰か來て居ますよ」
とカジオが突然叫び出した。一同は眼を放つと、リンデン樹下の小路を誰やら疾風の如くに走せて

来る。路程九町ばかりもあるよ。

「誰だろふ？何といふ早さか！」とお父さんが立上つて云はれる
「塵埃でも飛んでる様に早いなあ」

炎熱焼くるが如き暑さだ。二週間以上雨が降らないものだから
歩々白塵の雲が湧いて居る。誰やら分らないが、暫らくの間其の
近づき来る白雲を見て居ると、前庭の彼方數十歩の處に来て、其
の雲の中から、膨脹した赤い大きな鼻穴と、鋭い眼と、漲る鬚と
を持た馬の頭が現はれた。白馬が一目散に駆けて居るのだ。其が
足も地につかぬ程軽く疾走して来る。其の脊にベタリと打伏して
乗つた鞭靱風の男は、セリムに相違無い。

「セリムですよ、セリムだ」とカジオが叫んだ。

「氣狂者何してるんだ。門は閉ぢてあるのに」と私は跳ね上つて

叫んだ。

「門を開けてやる隙は無い。セリムは狂人の如く駆けつけて来る
高い一間半以上もある門の上には鋭い鐵釘がある。セリムは其れ
にぶち當るに相違ない。」

「神よ助け玉へ！」と坊さんは叫んだ。

「門！セリム！門！」と私は一生懸命駆け出しながら叫んだ。

門から一丈五六尺も隔つて居やうと思ふ時、彼はズツと鞍の上
に身をそらして、電光石火一瞥以つて距離を側つたかと思ふと、
玄關で叫ぶ女の聲と、馬のガバンクが一時に聞えて、馬は前脚
を空に擴げて飛び上る。止まつたんぢや無い、極力の勢で一瞬、
門を飛び越したのである。

玄關の前に来てセリムは駿馬の手綱をとれば、馬は蹄で地に穴

を掘る。すると、セリムは帽子をとつて大盃の如くに動かしながら、「皆さん茲に居らつしやいましたか？如何でございますか。ご主人様ご機嫌よろしゅうございますか？」と云つて内のお父さんに禮をする。「坊様、バニーさん、ハニヤさんご機嫌よろしゅう。お久しぶりでした。萬歳、萬歳」。

彼は飛びおり、丁度家の内から走せつて来たフラネクに手綱を投げ與へて、先づお父さんに抱きつき、坊さんに抱きつき、それから婦人達の手に打伏して接吻した。

バニーとハニヤは怖れて眞蒼になつて居た。其に死から逃れたセリムを歓迎するのであるから。

「氣狂の様な事をしたなあ、これ狂者、吃驚したんだよ」と坊さんが云はれる。「もうお前は死ぬる者だと思つて居た！」

「何故？」

「門。無鐵法ぢや無いか？」

「無鐵法ですつて？私は門の閉ぢてあつた事はちやんと知つて居ました。ご覧なさい。僕は爛々たる鞭鞭人の眼を持つて居ますよ」

「でも怖か無かつたか？」

セリムは笑つた。「いゝえ少つとも。併し、飛び越した功蹟は私のものでなく、全く馬のものです」

「貴嬢の爲、勇敢な少年が其處へ居らしやいますよ」とバニーがハニヤに向つて云ふた。

「本當ですわ、這麼勇ましい事は誰にも出来はしませぬわね」とハニヤが答へた。

「這麼馬や、這麼人のまたと居無いのはお望みだからね」と私は

ハニヤ

云てやつた。

ハニヤは私をジツと見つめて居たが、

「あら、知らないわ！」と云つて、セリムの處へ行き、「天晴ですわ」といはひばかりの顔をして居た。セリムの演じた様な勇敢な仕業は何時も女の喜を買ふものだ。丁度その時セリムの眞黒なふさ／＼とした髪は額から頬の邊に打壓いて、眼は壯絶と喜悅に輝いて居た。彼が、奇異の念を以つてハニヤの直ぐ側に立つて、ハニヤの顔を見守つた時の美しかつた事。如何な藝術家でも這廬男女一對の美を描き出す事は出来まい。

私は其の「知らないわ」といふ言葉に鐵の様な決斷の調子の慄げるを感じた。堪らない氣がした。セリムの馬を見て居られたお父さんの顔を見ると、あり／＼と其の顔に父たるの大望と、私に

打勝つたセリムに對する嫉妬の情が讀まれた。お父さんは其の時以來セリムに對して快く思はれなくなつた。其處で、私は「私だつてセリムに負けはせぬ」といふ事をお父さんに知らせたいと思つて、

「よく駈ける馬ですね」と云ふた。

「うむ。乗手も巧い。お前も出来るかい？」との返答だ。

「ハニヤは疑つて居ます」と私は一種の苦々しさを感じて云つた

「やつて見てよいですか？」

お父さんは躊躇して門を眺め、其れから馬を見て云はれる。

「まあ、そう、奇立な」

「奇立つても何でも無いが、セリムの出来る事なら僕だつて出来るから、やつて見たい迄の事ですよ」

ハニヤ

「君何を云ふのか？」と其の時セリムは私の首に抱き附いた。

「やつて見ろ。一つやつて見ろ。ベストを盡して」とお父さんは高慢の氣に觸れて居らるゝ。

「馬を連れて来い」と私はフラネクに云つた。フラネクは疲れた馬をポトリ／＼庭の方へ引つ張つて行くところだつた。

「ヘンリックさま」と其の時ハニヤは座から飛び立つて叫んだ「私が悪るう御座いました。本當に私が悪るかつたんですから、お止し下さいませ。後生ですから」

と云ひながら私の瞳を見たが、其の眼は口に云ひ得ないものを語つて居た。

其の眼を見ると、湧き立つ血汐がいくらか收つたが、私はまだ退く事は出来ない。辱められた自尊心は以前よりも猶強い。だか

ら私は冷かに答へた。

「悪るかつたつて、貴嬢は何も悪るい事はして居ないぢやありませんか。僕は門を飛び越して自分を慰めるまでの事です。」

斯う云ひ放つて誰が止めるのを聞かず（お父さんは何とも云はずに見て居られた）に、ヒラリと馬に打乗つて、一鞭リンデン

の木の下路へと進んで行つた。フラネクは門を開けて、復閉ぢた。私は心の中では苦しかつた。三百歩計り驕りたてゝ、駒を返すや馬は疾風の如くに駆け出す。

ハツと私は鞍の不安定に氣づいた。仕舞つた——、其に馬の腹帯がゆるんで居る。急いだ爲めか、フラネクが全々忘れて居た爲めか、今迄氣が附かないで居た。

もう遅い。馬は全速力で門に近寄つて居る。私は其をひき止め

やうとは思はない。「死んだら、死のう」と決断した。思はず馬の横つ腹をぐいと緊めた。空気が耳の中にびゅーと嘯く。急ち門頭の釘が光つて見へる。私は鞭を振る。身は空から生れて来た様な感じにズンとする。玄關からの叫聲が耳をつく。私の眼は眞暗になつた——暫らくしてハツと気がついてツト立上つた。「何うしたのかね？」と私の方から叫んだ。「落つちて居たのかね？少つとも分らなくなつて居た」私の側にお父さんと、坊さんと、バニーと、セリムと、リンデンの様に眞白になつたハニヤが立つて居る。ハニヤは涙一ぱい。「どうした。どうした」と皆が叫ぶ。「何でも無い。落つちたんだ。でも僕の失策ぢや無い。腹痛がゆるんで居つた」

事實、暫らくは茫んやりとして少つとも分らなかつたが、もう分明となつた。何ともありはしない。お父さんは肩をさするやら手足をなでるやらして、

「怪我したんぢやないか？」といはれる。

「いゝえ、大丈夫です」

呼吸は舊に復した。けれ共私は腹立たしい。何だか笑はれて居る様な気がしたからだ。私は馬から投げ落されて路傍の草の上に倒れて居つたのだ。其の證據には眞白の服の臂や膝が緑色に汚れて居る。服装も髪も亂れ果て、居る。セリムに勝どうと思つて居つた矢先に、斯ういふ有様なもの。ハニヤは切りに物案じて居た。きつと私の落ちた原因を探つて居たのだらう。然るに愴惶て深切に慰るに私の服装の世話をし呉れるので、私は直ちに歡喜を回

復した。一寸先刻までは一種憤怒の念があつたが、もう誰に對しても愉快な氣が起きて來た。それから皆も愉快になつて、晝食が出る。ハニヤが給仕する。それから一同庭に出る。庭に出るとセリムは子供の様に戯氣て、笑つたり、饒舌つたりする。ハニヤも其に調子を合せる。最後に彼は、

「あゝ愉快だなあ」と叫び出した。

「誰が一番愉快でせう。知りたいわ」とハニヤが云つた。

「僕だよ。確かに僕だ」とセリムが答へた。

「いゝえ、私よ。私はね、喜の性なんですもの」

「一番喜ばないのはヘンリック君だね。君は先天的に神秘莊嚴で一種の悲哀を持つてるよ、君が若し中世期の人だつたら武者修業をする詩人になつたに相違無い。君は天性泣く事が好きで、ハニヤ

さんは天性笑ふ事が好きだ。でね、君達二人は結婚し給へ——」
とセリムが切り出した。

「おいセリム！」と私が遮れば、セリムは私を見て笑い出す。

「君は悲哀の人で、ハニヤは歡喜の人だから結婚し給へ。そうすると何うなるかといふに、一人は泣き、一人は笑ふんだよ。そして、一生二人は相互を解する事は出来ない。融和が出来ない。俺だつたら一生涯二人で笑つて暮す事が出来るよ」

「あなた何仰しやるの？」と云つてハニヤは笑ひ出した。

私は笑ふ段では無い。セリムの断定は全く異つて居る。私は極度の憤怒を感じ、諷刺的に云ふてやつた。

「おい君こそ變な男だ。俺は早くから氣が附いて驚いて居た。君は涙ぼい女を見さへすれば、ほろりと引きつけられて仕舞ふちや

ないか？」

「俺が」とセリムは吃驚する。

「勿論さ。それ君の好きな女を想ひ出したぞ。あのフクシヤ草の中で、君達二人の泣き面はどうだつた。僕は今迄あんな悲しい顔を見た事は無かつたぜ」

ハニヤは手を叩いて、

「おほ！ 珍らしいわ。其の女は奇麗ですか。セリムさん、ゑゝ奇麗ですか？」と笑ひながら云ふた。

私は、セリムがまご／＼して度量を失ふだろふと思ふて居たが、びくともせず、

「ヘンリック君」と一言私に云つたばかり。

「何だ」

「其は早い昔の事ぢや無いか？」とて、彼は笑つて居る。

ハニヤは其の人の名は何といふのか切りに尋ねる。セリムは少つとも躊躇しないで、

「ヨシア」と云つた。

「美人ですか？」

「ゑゝ美人です」

「どんな眼つきをして居らつしやるの。お髪はどんな？」

「奇麗だけれど、他の人にも勝つて私を喜せる程奇麗ぢや無い」

「あなた、どこを一番お好きになつて居ますの？」

「髪も眼も今茲に見て居る貴嬢と同じ様に奇麗だつたらよかつたふけれど」

「あら、厭だ」

ハニヤは顔を翳めたが、セリムは両手掌を合せて、何とも名状されぬ程美しい眼ざしをして、

『ハニヤさん。怒つてはいけません。僕が何しました。怒つてはいけません。女は笑ふべきものですよ』

ハニヤは彼を見ると、スツと額の雲が晴れた。セリムが酔はしたのだ。ハニヤはセリムの顔を見ながら口元に微笑を洩らしたが眼も顔も明るく輝いて、柔らかな優しい聲で答へた。

『怒りなんかしませぬよ。あなたさへ御親切でしたら』

『僕はモハメットを愛するから親切な事は定つてる』

『あら、あなたはモハメットを其處に愛しなさるの？』

『乞食が犬を可愛がる位に』

あは〜と二人は笑ひ出した。

『でもね、ヘンリックさんは誰を可愛がつて居らつしやるでせうね私尋ねましたんだけれど、教へて下さらないですもの』

『ヘンリックさんはね（と云つて一寸私を顧る）まだ其處人は無いが……僕はよく知つてる。それから僕は……』

『あなたは何つて？』とハニヤ騒く胸を隠して問ふた。

『私もヘンリックさんと同じだが、一寸待つて下さい。ヘンリックさんは最早戀して居ますよ』

『お止しなさいよ。そんな事』

『ねえ君！』とセリムは私の首に抱きついて、復ハニヤに向ひ、

『貴嬢はヘンリックさんが甚處に貴嬢に對して忠實であるかを知られたら、お分りになるでせう』

『あら、私知つてますよ。祖父さんがなくなつてからの事を思ひ

出しますわ』

悲哀の雲が私共の間を往來した。

『お話して聞かせますよ』とセリムは話頭を轉じて語り出した。

『僕等の試験が済むで、或る日のこと、某先生と祝宴を開きました——』

『そして酒ち占し上つて？』

『そうです。及第して一杯傾けるのはお定りの習慣ですからね。

私は斯ういふ軽々しい男ですから、祝宴の最中、貴嬢を祝つてあげました。實は正直に祝つて上げた積りだつたけれど、ヘンリック君はぶいど起ち立つて、這處で何故ハニヤの名を呼ぶんだと叱つたのです。そこは居酒屋でした。私共は其の爲決闘せむばかりでした。ヘンリック君は誰にも貴嬢を傷ふ様な事を云はせまいとす

るのです。決して云はせまいとするのです』

ハニヤは私に手を投げかけて、

『御深切さま！』といふた。

私はセリムの言葉に促がされて、

『セリム君は正直ぢやありませんか、斯處事迄云つて呉れますからね』とハニヤにいふた。

『これで俺は仲々正直な男だよ』とセリムは笑つて居た。

『あなたは誰の爲にもなる方ですね。御一緒に居ますと、這處に愉快ですから』とハニヤはセリムに向つた。

『貴嬢は僕等の女王様です』とセリムはすかさず叫び出した。

『あなた方、お茶めし上れ』と庭の縁側から、パニー夫人が呼んで居られる。

三人は皆愉快な感じがして茶飲みに行つた。テーブルは縁の下に置かれて、燈火が明るく點れ、蛾が其の廻りに輪をかいて、ホヤのところでバタつく。野葡萄の葉はガサ／＼と暖かい夜の空気に動き、白楊の彼方には大きな黄金の月が上つた。ハニヤとセリムと私との間の最後の話は不思議な程優しい親密な調子を吾々に與へた。靜蕭な夕は年老ひたる人々にも一種の感想を興させた。お父さんと、坊さんの顔は空の様に嚴かであつた。茶が仕舞へると、バニーは獨唱を初める。お父さんは大な上機嫌で、昔話をされる。

『久しい以前の事。私共はラスノスタブの或る村に滞留した事があつた。眞暗な夜だつた。(と云つて、煙草の煙を吹き出すと、其がランプの上に漂ふ)人々は駄馬の様にグツたりと疲れて居た。

僕等は黙つて立つて居ると——』とて、お父さんは不思議な物語を初められた。坊様は度々此の話を聞かされたのだけ共、煙草を吸ひながら、黙つて聞いて居られたが、額の處へ、眼鏡を上げて、『うむ、うむ』と點頭いたり、『ふむ、其れから』など繰り返して云はれる。

セリムと私は肩をすり寄せながら、お父さんをジツと見つめて一言ものがさずに聞く。其の時セリムの表情と云つたら無い。眼は百炭の様に輝いて、全面が赫とする。熱烈な東洋氣質が全面に油の如く浮んで来る。そして、もう少つともジツとして居られぬ様な風情である。バニーは其の様を見て微笑を洩しながら、『あれ御覽』といはむばかりに眼先でハニヤに教へた。するとハニヤも其の顔を見つめる。二人の女はセリムの顔を見て面白がつて居た

セリムの顔は鏡か、水面かの様に透明で、あたりのものを悉く映して居るやう。

今日でも、其の晩の事を思ひ出すと、私はむらむらとして胸の動いて来るのを禁ずる事が出来ない。其の時から星變り年移り、何年経つたやら分らないが、翼ある記憶は、なづかしい田舎屋の面影を思ひ浮かべしめる。夏の夜の楽しい家族、調和、幸福が眼の前に髣髴として現はれる。——お父さんの老練な昔語り、火の様に輝く眼を持った青年、野の花の様な顔——あゝ、あれから本當に星移り年が變つたものである。

さて、話に歸るが、十時になつた頃、セリムは直ぐ飯れどの知らせを得たので、ふいと起ち上つた。一同は第二門の邊なるヨンテン樹の出はづれ迄、見送つて行く。私は馬に乗つて、草原の果

まで行く事にした。グウ〜と寝込んだカジオの外皆彼を見送つて行つた。

ハニヤとセリムと私が真先になり、ハニヤが中に、吾々二人が右左に手綱をとつて行つた。三人の老人は其の後ろを歩んで来る。木の下路は眞暗であつた。月光は僅か木の茂みから碎けて洩れて来て、暗い路に銀光を放つて居た。不圖「何か歌はうぢや無か」どセリムが云ひ出した「何か古い高雅な歌がよい。フィロンの様なのがよい」

「誰も其の歌は知らないでせう」とハニヤは云ふ。「私、別なのなら知つてます。」

おゝ秋よ、秋よ、
梢、木の葉に打慄ふ——

吾々は先づ、フィロンを歌ふ事にした。それから、「秋よ秋よ」を歌つた。ハニヤはセリムの馬の鬣に白い手を置て歌ひ初めた。

月は沈みぬ、
犬は眠れり。

松森の彼方―彼方、

聞こゆなり、手の音、人の手の音。

フィロンこそ、愛しきフィロンこそ、

美はしき楓の木の下に、

私を待ちて、眺め給ふなれ。

歌は仕舞へた。老人達の聲が後ろの暗闇の中に聞へる。「巧いぞ巧いぞ、もつと何か歌へ」私は一生懸命に歌つたけれ共、よくは歌へなかつた。ハニヤとセリムは仲々立派な聲を持つて居る。特

にセリムは美しい聲だ。私が時々突拍子で歌ふと、セリムとハニヤが笑ひ出す。其からハニヤとセリムは復別な歌を歌ふ。其の時私は思ふた。「何故ハニヤはセリムの馬の鬣を握つて、俺の馬の鬣を握らないのだ？」ハニヤは其の馬を極めて可愛がつて居る。時、彼女は其首になり下つたり、首を叩いたりして「いゝ馬ね」と繰り返して居た。すると優しい馬は、鼻息を吐き、鼻穴を広く開いて砂糖でも欲しがらる様にハニヤの方に鼻先を差し出す。此を見るに、私は復悲しくなつた。そして私は其の馬の鬣を握つて居る手の外何ものにも気が附かなかつた。

暫らくすると、一同はリンデン樹の出はづれに着いた。セリムは皆の人々に左様ならを云つて、バニーの手に接吻をして、今度はハニヤの手にもしたい様子であつたが、ハニヤは私の顔を見て

ハニヤ

恐れるものゝ様に引き退いた。けれ共、ハニヤは返禮にセリムに近づいて語つた。さやかな月の光にすかして見ると、ハニヤはセリムの顔にジツと見とれて居る。其の表情の美しかつた事よ。
「お忘れなさるな。復ち目にかゝつて歌いますよ。でも今晚は去様なら」ハニヤは斯う云つて、自分の手をセリムに渡した。

ハニヤと老人達は家路に就いたが、セリムと私は草原の方へと進んで行た。暫らくは、木影の無い路を黙つて進つた。皎々たる明月に路傍の草の葉も數へられる位。馬が時々鼻息を吐く、鐙と鐙どがガチリと行き合ふ。私はセリムを見た。セリムは何やら思ひに更つて、夜のどん底を望んで居た。私はハニヤの事を語りたくて堪らなかつた。其の一日の印象と、ハニヤの云つた言を誰かに打明かさなければ止まれない様な氣になつたけれ共、何う云

ひ出してよいやら分らなかつた。處が何を思つたのか、セリムは突然私の方を向いて、私に抱きつき、首に接吻して呼んだ。

「あゝ、ヘンリック君、君の妹は何と美妙な人だらう。ヨジャの様な女はもう厭だ」

之を聞くと、私は嚴冬の吹雪に襲はれた如く、ゾツとした。私は黙つた儘、セリムの腕を私の首から、突き放して、彼を跳ね退けながら、進んで行つた。暫らくすると、彼は復私に向つて、

「君は怒つて居るのか？」と云ふた。

「君は子供だな」

「君は屹度僕を恨んで居るだらう」

私は手綱をどつた。

「セリム君左様なら」

セリムは確に私を嫌つて居たけれ共、悲しげに手を擴げて、何か云はふとした。然し、私は急に馬を廻して駆け出した。

『左様なう』とセリムは叫んだ。

彼は其の場に暫らく立ち止つて見て居たが、遅々とホールレリをさして出立した。

私は速度をゆるめて除々と馬を進めた。美しい、静かな暖かい夜である。草原は露一ばいで廣茫たる湖の様だ。野の彼方此方から、秧鶏が泣いて、遠くからサンカノゴイが答ゆる。私は星漢爛たる無窮の蒼穹を仰いで、泣いたり祈つたりしたくなつた。

忽然後ろの方に馬の足音が聞こえる。ふりかへるとセリムである。彼は私に追つ着いて、私の前に現はれ、非常に激した聲で云ふた。

『ヘンリック！大切な事があるので、立ち歸つて来たよ。俺は初め斯う思ふた。君が怒るなら、怒れど。けれ共後から君の爲めに悲しくなつた。僕はどうも堪らなくなつた。君何う思つて居るのか僕に云つて呉れ。屹度君は怒つてるだろふ。僕がハニヤと餘り話し過ぎたから。君はハニヤを戀して居るのだろふ？』

胸には涙が一ぱいになつて私は何とも答ゆる事が出来なかつた。あゝ私は何故最初のインスピレーションに従つて、誠實なセリムの胸に己が身を投げ寄せて、泣いて凡てを告白しなかつたろふ。私は何時でも人の真情に接して、心堪え難く、思ひを打明けて相語るふといふ時になると、一種高慢な氣がさして来て、私の心を凍へさせ、私の口を閉ぢさせる。斯ういふ高慢な心の爲めに、私は何丈幸福を抛つたやら分らぬ。今日迄、私は其を悲しく思つて

居る。

『お氣の毒だつたね』とセリムは續けた。

セリムは私に同情を持つて居つたけれども私は黙つて居つた。彼は天使の様な眼ざしで私を見て、悔ゆる様に訴ゆる様に、

『ヘンリック！君はハニヤを戀して居るのね。君が知つて居る通りハニヤは僕を樂んで呉れた。でも、もうお終へだ。君の望みならば、僕はもう決してハニヤに言を云はないよ。云つて呉れ。君はきつと、ハニヤを戀して居るのだらう。僕を悪く思ふのか？』といふた。

『俺は戀しては居ない。で何も君を悪く思つては居ない。俺は弱者だ。俺は馬から振り落された。俺は少つとも戀して居ない。俺は馬から落ちたんぢや無いか。左様なら！』

『ヘンリック、ヘンリック！』

『今云つたんぢや無いか。俺は馬から落ちた男だから……』

二人は再び別れた。セリムは別るゝに先ち私に接吻した。そして悠々と出立した。彼は、私が馬から落ちたから、這麼事を云つたのだと思つて居たのである。私は一人茫やりとして居た。一種の深い悲哀がこみ上つて来る。セリムの深切に動かされ、自身の俯甲斐なさに苛立ち、セリムを嘲つた自己の行爲を恨めしく思つて、私の胸は涙一ぱいになる。私は馬を走らせて、間もなく家の前に來た。

客室の窓から燈火が洩れて來て、ピアノの音が流れて來る。フラネクに馬を渡して、室に這入る。ハニヤは私の知らない歌をうたつて居た。ハニヤは未熟なので、勝手に調子を變へて歌つて居

つたが、其の音楽の力では無く戀愛の魔力に私の魂は悉皆迷はされて仕舞つた。室に這入ると、ハニヤは彈奏の手を止めないで私に向つて微笑む。私は向い側にある安樂椅子に身を投げて、ハニヤを見た。樂器の上に彼女の端麗な額が見へ其の眉は極めてよく調つて居る。鍵盤を見て居るので、眼毛は下を向いて居る。暫らく弾じて後、ハニヤは顔をあげ、私を見て、情愛の籠つた柔らかな聲で『ヘンリックさん！』と云ふた。

『何です？』

『何かお尋ねしたい事がありましたのよ。あなたは明日復いらつしやる様にセリムさんをお招きなされたので御座いますか？』
『いえ。明日はウスツリに行かなければなりません。お母さんからの荷物が其處まで來てるから』

ハニヤは暫らく黙つて居つたが、復優しい數曲を弾じた。其は自分の悲しみを蔽ふ爲めに過ぎなかつた事が分つた。ハニヤは何やら何處事を考へて、暫らくして眼を上げて云ふた——

『ヘンリックさん？』

『何です？』

『私何かお尋ねしたい事がありますのよ。——ね、あのね、ワルソウのヨジャさんは美人ですか？』

只其の一言で私の胸中の激怒は心頭を突破して來た。私はツカツカどピアノに近寄る。私の唇はぶる／＼慄へた居た。

『貴嬢より美しくは無い。安心なさい。貴嬢は大膽にセリムを迷はせるがよ』

ハニヤはピアノの腰掛から起ち上つた。顔は眞赤になつて居る

「ヘンリックさん。何を仰つしやるの？」

「お前の狙つて居る事をさ」

私は帽子を攫んで、ハニヤに禮し、ツカカツと室を出た。

七

一日の間私が是等の激動を感じて、其の夜を如何に過したかは容易に推察せらるゝでせう。私は床に就て先づ自問自答した。「今日は如何なる事があつたか？」「何故這麼事にならなければならなかつたか？」「失策は皆吾が身の上にあるでは無いか？」と斯う思ふと一寸吐息が洩れたが復反感が起る。彼等二人の關係は私の失策から、あゝなつたのだとは思つて見たものゝ、私は一種云ひ難い危険が未來に臨んで居る事を感じた。そして其の危険なるもの

が何麼ものやら分明せず、セリムとハニヤを嘲るわけにも行かないので苦しい。さながら暗夜蛇の群の中にある思ひがした。其に心身は長路の旅に疲れた者の如くグタク／＼となつて居る。すると復絶え間無く、苦々しい痛さが心頭を突破して来る。「其は僕だ。疑もなく僕だ。僕の嫉妬の情と卑怯の念とは反つて彼等二人を引き結んだのだ」百念百想が私の胸中を往來する。私は斯うして寢て居ると、段々思想が朦朧になり、ばら／＼になり、遂には睡眠状態になつて何が何やら分らなくなる。其のごだ／＼として何が何やら分らなくなつた心の中に、いろんな不思議なものが突き出て来る。お父さんの物語、物語の事件や人物、セリム、ハニヤ、私の戀。多分私は馬から落ちた時から熱發して居つたに相違無い蠟燭の心がばたと燭台の上に落ちて、眞暗になり、青い炎がふら

ふらと其れも遂には微かに消え失せる。もうずつと夜は更けて居たのだろふ。窓外には鶏が鳴いた。私は壓へ附けられる様な不健全な眠に陥つて、仲々眼が覺めなかつた。

翌朝頗る朝寝して、朝飯の間に會はず、午前稽古に出るハニヤに會ふ時間も無かつたが、永い間眠つて元氣は回復したので、もう世間を暗く見ない。「ハニヤには深切丁寧にしてあげよう。そして昨日の疝癥を詫びよう」と考へた。

でも昨夜私の叫んだ最後の一言が、ハニヤに痛い思ひをさせた事を少つとも知らなかつた。で彼女がバニーと中食の爲め室に入つて來ると、私は大急ぎでハニヤに近寄つたが、俄然、誰からか水でもぶつかけられた様に、びく／＼して退いた。といふは故意でやつたのでは無く、撃退されて退いたのである。ハニヤは丁

寧に「今日は！」と云つたが、其の中には全く私を疎外した冷淡なものが含まれて居た。私はバニーの側に腰掛けて居つたが、食事中、ハニヤは少つとも私の居る事を心にもかけぬ風情であつた。私は實に空虚な哀れな感じがした。何うしたらよかるふ？ 私はむらむらと反抗心が起つて來た。何だ俺もハニヤに仕打をしてやろふ。あゝ、あらゆるものに勝つて人を愛するといふ事は不思議な事である。食事の間私は直接には只一言もハニヤに云はなかつた。只人の仲立を借つて云ふばかり。例へば、ハニヤが「夕方になりましたら、雨が降りそうでございますね」と云つた時、私はバニーの方を向いて、バニーに「雨は降りますまいね」と云ふ様な事である。斯ういふ拗た、反抗が私には嬉しかつた。そこで斯ういふ事も思ふて見た。「バニーさん、僕はウスツリに行くのです

が、何麼風にして行つたがいゝでせうね。ウスツリに就て、故意に人々の前で、何事なりと尋ねて、秘密の皮を脱いでやるう」
私は思つた通りを云つた。

ハニヤは食事が終つて、お父さんに黒珈琲を注いであげ、

「私、ウスツリには行きたくありません」といふ。

「何たる姦婦ぞ」と私は思ふた。

お父さんは耳が遠いから一度では聞きとれず、ハニヤの額に接吻して尋ねられる。

「では何うしたいのか？」

「私はお祈りしなければなりません」

「それは又何故だ」

「ウスツリに行かない様に」

「何故行かないのか？病氣なのか？」

「病氣だと云へば其つきり。お父さんは少つとも機嫌悪くはなさらない」と私は考へた。

けれ共ハニヤは決して詐らなかつた。無邪氣にも詐なかつた。

「私丈夫なんですけれど、行きどう御座いませんの」

「そうか。でも、ウスツリにはお前の用があるから行たがよい」

ハニヤはお辭儀をして黙つた儘退いて仕舞つた。

暫らくして、私はお父さんが何故ハニヤに行く様に命じなされたかと尋ねた。

「近隣の人々にハニヤを内の親類だと思はせて、親しませる爲だよ」

是を聞くと私は嬉しくて堪らなかつた。

五時になつて出立する事にした。ハニヤとバニーは二階で着物を着替へて居た。私は二人乗の馬車を出させた。私一人は馬に乗つて行かふといふのである。ウスツリ迄は一里半ある。天気はよし、馬を驅るには此の上なした。ハニヤは黒着を着て居たが、念の入つた優美な服装。引きつけられる程美しい。私は其を見ると急に心が柔らかく融けて行きそうになつた。反抗心や、技巧的の冷淡は最早何處へやら飛んで行つて仕舞つた。けれ共、ハニヤは益々女王然と構へて居る。私も立派に着飾つて居るのに、一目だつて私を見て呉れない。

丁度五時になつて婦人達は馬車に乗り、私は馬に跨つた。出立した。私はハニヤの注意を避ける爲め、側を離れて進んだ。けれ共、私の馬が飛び上つた時、確かにハニヤは涼しい眼ざしで、私

を頭から足まで見て、微笑としたが、直ぐにバニーの方を向いて何やら止め度なく語り出した。

遂にウスツリに着いた。セリムは己に来て居つた。家にはウスツリと、二人の婦人即ち佛蘭西女と、獨逸女、それからお嬢さん達ばかりが居た。姉さんの方はロラと云つて、ハニヤと同年の可愛い栗色の髪房々とした女で、妹のマリニヤは未だ子供である。

挨拶が済むと、婦人達は直ぐ庭園に莓ちぎりに行つた。ウスツリ君はセリムと私に新調の武器と、野猪獵に使ふ獵犬を見せるから来いと云つて連れて行つた。其の犬は高價を拂つて、ロスラビールから買ったのだ相な。私はウスツリ君が此の地方で有名な獵好きで、金持ではあつたけれ共、仲々深切でよく働いて人々に尊敬されて居る事を知つて居た。けれ共、只一つ彼は私の厭な缺點を持

つて居た。彼は始終笑つて居る。一言二言云へば、もう笑ふ。で村の人々も彼を「道化先生」と云ふて居た。

道化先生は私共を犬小屋に連れて行た。私共が如何に婦人達と一緒に庭に居りたく思つて居るか、其れには、てんで氣が附かないのだ。私共は暫らく主人の云ふ處に耳傾けて居つたが、パニールさんに云ふべき事を思ひ出した。するとセリムが巧く云ふて呉れた。

「仲々立派な犬ですね。立派な犬です。でも私共はこれから婦人達の處に行きたいと思つて居ます」

「其れぢや、さあ一緒に行きませう」

私共は行つたが、行つて見ると期待した程でも無い、人を離れて居たハニヤは依然私を知らぬ振して、セリムと一緒に居ようと

思つて居たのだ。私はロラと一緒になつて毒の實をちぎりながら絶へず、セリムとハニヤのや舉動に氣を付けて居たので、ロラの親密な間に、何う答へたか、少つとも憶えが無い。セリムは私には氣が附かなかつたが、ハニヤは氣が附いて、聲を低めて語つては、静と、なづかしげにセリムを見て居た。

「待て！ ハニヤ、お前は激い事をして居る。よろし。其では俺もお前に對して無残な事をしてやるぞ」と私は想つて、ロラの方を向く。先に書く事を忘れて居たが、ロラは私に對して特別な優しさを持つて居て、何の遠慮も無く明かに其の情を見せつけた。私は何だか慕しくなつて來た。そして何だか、泣きたい様なものが胸にこみ上つて來たが、わざと笑つたり、好意を得る様な言を云つたりした。でもロラは青黒い打濕つた眼でジツと私を見て、何

やらローマンチックな感想に更つて居た。

あゝ其の時、私は如何にロラを悪く思ふたか。二人が話をして居る中にも、ロラがセリムとハニヤの間を面白くないとてほめかすど、私の心は憤激の餘り戦慄して居つたけれ共、勉めて心を抑へて笑つて居た。

斯うして一時間を過ぎた。それから、すゝり泣して居る様な栗の木の下で辨當が出る。栗の木は枝もたわゝに地に垂れ下つて、自然に縁の圓屋根をなして居た。座に就くと先づ私は、ハニヤがウスツリに行くのを嫌つたのは、私故では無い。別な理由があつたのだと思つた。

理由は只是丈の事である。パニーさんは、佛蘭西の華族出で。他の婦人達よりは高等な教育があるので、ウスツリの佛蘭西婦人

より、いくらか勝つて居ると考へて居たし、勿論獨逸婦人よりはずつと優れて居ると思つて居た。其から其の二人の婦人はハニヤよりずつと身分が高いと思つて居た。何故かとなればハニヤの祖父さんは下僕であつたからである。高等な教育を受けたパニーは自分の感じを少つとも人に氣づかせなかつたが、二人の婦人はハニヤを厭な程輕蔑した。是は普通な女に有り勝な競争であり、虚榮である。けれ共私はウスツリの女達より百倍の價值のあるハニヤが彼等の玩弄物となる事を許さなかつた。ハニヤは氣を取り直して、優しく輕侮に堪へた。其の様が何とならハニヤの品性を美しくした。けれ共斯る俟遇はハニヤにとつては痛らい事である。若しウスツリの主人が居られたら斯ういふ事も無かつたるふが、主人の居ないを幸ひ二人の婦人は處得顔である。セリムがハニヤ

ハニヤ

の側に座ると、私語やら、戯談が初まつて、其れにロラさへ加はる。其は全くハニヤの美貌が悪いからである。私は幾度か是等の侮辱に反抗した。鋭く反抗した。或は餘り鋭過ぎたかも知れない。ところが今度はセリムが私に代つて出かけた。憤怒の閃きがセリムの眉間に見えたが、彼は急ちうんど其れを腹に飲み下して平靜になり、女達を輕蔑様に瞋むで居た。年に似合はぬ鋭い痛切な智力と雄辨に富んだセリムは散々に婦人達を困らせて、彼等をして避處無き迄に至らしめた。バニーさんは、上品な威嚴を保つて、セリムの加勢をして下さる。私も二婦人を追ひ放つた。ロラは私の氣を損ふまいと思つて、私共の側に來て、不眞實ながら何時もに倍する程の諂を呈する。一言以つて云へば、勝利は私共のものであつた。けれ共不幸にも、腹立たしくも、第一の功績は復セリ

ムの手に落ちた。ハニヤは氣を轉じて平氣を裝ふて居たものゝ、眼には一ばい涙を湛へないでは居られなかつた。そして、感謝と敬意を表して、セリムを救主の如くに見上げた。だからテーブルから隔れて、復二人づゝ庭園を歩く時、ハニヤはセリムに身を傾けて、秘かに囁いて居た。

『セリムさん！私ほんとに……』

そして彼女は急に立止つた。せぐり上つて來た涙を抑へて、泣くまいとしたからである。

『ハニヤさん。氣におかけなさるな。御心配なさるな』

『私、這麼事になると何もお話が出来なくなるものですから、ほんどに有り難う——』

『何うしまして。貴嬢が……』

セリムは情を表はす事が出来なかつた爲めか、茲で話を切つて仕舞つて、胸一ぱいになつた感情を見られてはならぬとばかりに顔をそむけて黙り込んだ。

ハニヤは涙に輝く眼をあげてセリムを見た。私は何うしたのかと尋ねもしなかつた。

私は青春の魂の有る限りの力を盡してハニヤを愛して居る。私は彼女を人間以上に敬して居る。私は天上界の愛を以つて彼女を愛して居たのである。私は彼女の姿が好きだつた。眼も好きだつた。髪の毛の一本一本までも好きだつた。其の言葉の響も好きだつた。私は彼女の衣が何處でも好きだつた。其の呼吸する空気が好きだつた。戀は段々私に深く徹して来る。只心ばかりでは無く、全人が戀に動いて来る。私は彼女の中に生き、彼女に依つて生きて

居た。戀は私の心に鮮血の如くに流れる。そして體温の如くに私の身體から發射する。人にとつては戀の外に存在物があるよ。けれど共私にとつては戀の外何物も存在して居なかつた。私にとつては全世界は戀の中に存在し、戀に勝るものは何物も無かつた。私は世間に對して全々盲目であり、聾であり、無頓着であり、私の理性も感覺も其の單純なる感情で支配されて居た。私は恰も炬火の如くに燃へて、其の炎が私を喰ひ、爲めに私は死に類して居るに様な感じがした。其の戀とは何であるか？ 力強い聲である。即ち吾が魂が人の魂を呼ぶ力強い聲である。「吾が神秘なる人よ、吾が神聖なる人よ。吾が戀人よ。予の云ふを聞け！」然るにハニヤは私の心の叫びに答へては居なかつた。無頓着な人々の間にあつて、戀に渴ける私は森林の中に迷ふて居る心地がした。そして、

同情の聲が答へるか否か、呼びつ叫びつして待つて居た。然るに私の愛の外に、空しい叫びの外に、相愛せる二つの聲を聞いた。セリムとハニヤの聲である。彼等は互に心の聲もて呼びつ應へつして居た。彼等は私を哀れんで、しかも其を少つとも自分には氣づかないで呼んで居る。一人は森の響の如く他の一人を呼んで居る。すると其の一人が、他の一人に反響の如く應へるのである。吾が身の不幸となるべき、人の幸福に對して私は何うすればよかつたのか？ 自然の秩序に反抗し、事物宿命の論理に反抗して何うすればよかつたのか？ 反抗し難い力が他方面から迫つて居る時、何うしてハニヤの心に打勝たれたか？

私は人々を隔れて、庭園のベンチに腰掛けた。百千の思想は、射落された鳥の群の様に私の頭の中に響いて居た。物狂ほしい失

望ど苦痛どが私を捉へる。私は家族中にあつても、深切な人々の中にあつても猶淋しい思ひがした。全世界は砂漠の如く、吾が身は孤兒の様である。沈黙したる天は凡ての物を呑み盡し、其の憂鬱沈静な力で私を蔽ひ被ぶせる。其の名は死である。茲に至つて罪惡の世界から逃れ、苦痛を終り、凡ての悲曲を終り、痛い癩、結ぼれたる魂を絶ち切り、苦悶を脱して休息する事が出来る。ああ。其の休息だ、其の暗い休息を私は渴望して居た。其の皆無の休息を、永遠の平静を。

苦痛ど、思ひなやみに依つて私の涙は洒れて仕舞つた。只其の苦痛を何うかして解脱したかつた。如何なる代價を拂つても、生命の代價を拂つても。

其の時だつた。私の幼年の日の信仰は逃げて行つた、平静無窮

の蒼天から、一念の思想が小鳥の如く翔んで来て、私の腦裡に止まつた。其の思想とは何だ。一言では云ひ盡せない。其は一の世界であつた。私は一種抵抗し難い必然の力に促されて其の世界の中に這入つたのである。私は非常に苦しんで居た。けれ共、彼方の小路から喜ばしい聲が響いて來た。低い、よく聞きとれない會話の囁きである。私の身の廻りには花が薫つて居た。木々の梢にはビービーと小鳥が嘲つて時を求めて居た。頭上には夕焼した眞赤な静蕭な空が懸つて居た。萬物悉く平和で、幸福である。斯る生命の花の眞ん中に、苦しみ、齒がみして、私は一人死なむ事を希ふた。急ち慄然として私は戦いだ。私の眞ん前に婦人の衣の音がしたからだ。

眼をあぐると、其はロラであつた。ロラは平和で、しどやかで

同情否同情以上のもので私を見た。夕の光と、木立の投げた影の中に立つて、彼女は蒼白く見へた。其の房々とした髪は肩の上に落ちて居る。

其の刹那私は寸毫も彼女を恨む事が出来なかつた。「あゝ慈悲深い魂よ」と私は思ふた「汝は予を慰めひとて來りしかか？」

「ヘンリックさん。あなた何だか悲し相なお顔して居らつしやいますね。煩悶なさつて被居やるでせう？」

「そうです、苦しんで居ます」と私は叫んで、乙女の手を捉へ、其を燃える私の額に壓えつけて、接吻したかと思ふと、ブイと放して走り去つた。

「ヘンリックさん！」とロラは低い聲で後から叫んだ。

ところが、其の時、途を曲る處でセリムとハニヤが現はれた。

二人は私共の手をどつて額にあてたり、接吻したりしたのを見ながら「私共は何事だか知つて居ますよ」と云はむに、私共を見合はした。

間もなく歸宅すべき時間になった。門を出ると、セリムの歸るべき路は其處から分れて居る。セリムは何だか宅には歸らないで、私共の方へ來るのではあるまいかと私は怖れた。別れに臨んで、ロラは不思議な程暖かい手で私と握手したが、私は返禮もしなかつた。

門を出ると、セリムは直ちに後ろを向いてハニヤの手に接吻した。其がセリムにとつて初めての接吻であつた。ハニヤは少しも拒まなかつた。

ハニヤは私を知らぬ振りして居る。ハニヤは今朝の怒りを少つ

とも思ひ出さないのだらふ。極めて平靜な風采をして居る。ハニヤさんは、暫らくすると、居眠りを催して船漕ぎを初めた。私はハニヤを見た。ハニヤは眠つて居ない。其の眼は廣く開いて幸福に輝いて居た。そして只黙つて居るばかり。何か考へて居つたのである。家の近くに着いて漸く彼女は私を見て、私が餘り考へ込んで居るので、尋ねる――。

「あなた何をお考へ遊ばして？ ロラさんの事でせう？」

私は無言の儘、齒を喰ひしづつた。

私が黙つて居るのに驚いて、ハニヤは繰り返し尋ねる。すると私も遂答へない理には行かなかつた。併し言葉が尖つて居たので、私が今朝からの恐りを續けて居るものだと思つてか、彼女は黙り込んで仕舞つた。

二人は私が激動して、ロラの手をどつて額にあてたり、接吻したりしたのを見て居たので微笑しながら「私共は何事だか知つて居ますよ」と云はむばかりに、目と目を見合はした。

間もなく帰宅すべき時間となつた。門を出ると、セリムの歸るべき路は其處から分れて居る。けれ共セリムは何だか宅には歸らないで、私共の方へ來るのではあるまいかと私は怖れた。別れに臨んで、ロラは不思議な程暖かい手で私と握手したが、私は返禮もしなかつた。

門を出ると、セリムは直ちに後ろを向いてハニヤの手に接吻した。其がセリムにとつて初めての接吻であつた。ハニヤは少しも拒まなかつた。

ハニヤは私を知らぬ振りして居る。ハニヤは今朝の怒りを少つ

ども思ひ出さないのだらふ。極めて平靜な風采をして居る。ハニヤさんは、暫らくすると、居眠りを催して船漕ぎを初めた。私はハニヤを見た。ハニヤは眠つて居ない。其の眼は廣く開いて幸福に輝いて居た。そして只黙つて居るばかり。何か考へて居つたのである。家の近くに着いて漸く彼女は私を見て、私が餘り考へ込んで居るので、尋ねる――。

「あなた何をお考へ遊ばして？ロラさんの事でせう？」

私は無言の儘、齒を喰ひしはつた。

私が黙つて居るのに驚いて、ハニヤは繰り返し尋ねる。すると私も途答へない理には行かなかつた。併し言葉が尖つて居たので、私が今朝からの恐りを續けて居るものだと思つてか、彼女は黙り込んで仕舞つた。

數日經つて或る朝、曙光が扉の間からさして来て私は眼が覺めた。すると誰やら戸を叩く者がある。サラリと戸を開いて這入つて来る者はヨシアでも無く、ハニヤでも無く、鬘のはえた獵師のパー君である。彼は深い聲で叫んだ。

「若子様！」

「何だ？」

「ボホロビーの森に狼の群が、牝狼の後をつけて居ますが、獵に出かけなさらぬか？」

「よろし行かふ！」

私は着物を着替へ、鐵砲とナイフとを携へて出かけた。パーは

朝露にしつぱり濡れて、肩には長い汚ない一發銃を掛けて居た。一發銃ではあるか、彼は一度も狙をはづした事は無い。未だ早朝の事とて、朝日は出て居ない。で誰も未だ働きに出た者も無く、家畜も牧場に出て居ない。空は東の方が稍青、赤、黄金に彩られて、西方は淡暗かつた。老人は例の如くに大急ぎに歩んで行く。

「私が一頭曳馬車を持つて居ますから、穴まで乗つて行ませう」と彼は云つた。

吾々は車に乗つて、馬を驅つた。穀物倉を出はづれると、野兔が、燕麥の畑からビヨン／＼飛んで、路を横切つて草原の中に駆け込む。銀の白露の表面に黒い其の足跡を残して居る。

「猫奴が出て来たな」と獵師は云ふた「犬が喜んでらあ」……もう遅くなつたなあ。直き地が日になつちまふ——」

とは、「間も無く日が出て来るだろふ。曉の光に物體が影を投げて居ないから」といふのである。

「日影がさして来ると獵には悪るいのか？」

「影が長ければよいが、短かければ駄目でございます」

是は遅くなればなる程よくないといふのである。午頃になると影が短くなるからである。

「何處で初めやうか？」と私は尋ねた。

「ボホロビーの森の穴で」

ボホロビーは密林の一部である。穴といふのは暴風の爲め倒れた老樹の根がこげて出来たのである。

「どうだい巧く行け相かね？」

「私が牝狼の真似をして見ませう。したら、牡狼が出て来るでせ

5

「六ヶしいな」

「来ますども」

パーの家に届くと、其處へ馬車を置いて、徒歩で迎つた。半時間行くと朝日が出て、吾々は穴の中に身構へした。

四邊には見すかしも出来ぬ程茂つた樫木の藪があつて、處々巨大な樹木があるばかり、穴は深くて頭も出ない位である。

「さあ、脊と脊を向け合せませう」とパーが云ふ。

其處で脊と脊とを向け合せて、地面に頭のとつぺんと銃ばかりを出して待つて居た。

「一つやつて見ますぞ」とパーが云ふた。

口の中に二本の指を突つ込んで、口笛を吹きながら、彼は牝狼

の眞似を初めた。全く牝狼が牡狼を迷はす時の吠聲其儘である。

『お聞き』

と云つて彼は地面に耳をつけた。

私には何も聞へなかつたが、パーは地面から面を上て云ふ様、
『居りませぬ、居りませぬ。でも少つと遠いな。一里あります』
其から十五分間程経つて、復彼は指を喰へて吹き出した。陰氣
な、淡氣味悪い音が、森の間に響き渡つて、遠く遠く濕つぽい地
上を翔け行き、松樹の幹から幹へと反響を起す。パーは再び地面
に耳をつけた。

『やつて来ましたぜ。もう半里足らずです』

成程、遠吠の反響の様ではあつたが、遠く遠く微かに狼の聲が
聞えた。

『どのあたりに出て来るだろふな？』と私が尋ねると、

『若様の方さへ』と答へる。

パーは三度嘯いだ。すると吠聲がずつと近くに答へる。私は鐵
砲をウンと握りしめた。共に息をひそめる。天地の間はひつそり
として音が無い。只一陣の微風が榛樹の葉からハラ／＼と露をは
ふり落すばかり。遠く彼方、森の一端から山鶏の聲が聞へて来た。
忽然、三百尺ばかりの彼方森の中に何物かと現はれた。杜松叢
があわたとしく動いて、黒の針の様な葉の間から、尖つた耳と、
赤い眼を持った灰色の三角面が現はれた。私は射つてやろふと思
つたが、餘り其の頭が遠いので、心臓の鼓動をおさへて待つて居
た。すると直ちに杜松の中から飛び出して、ブラリ／＼やつたか
と思ふと、穴の方へと駆けて来た。あたりをぶつ／＼嗅ぎ廻つて

来る。百五十歩ばかりの處で彼奴は立止つて、何か前兆でも感じたかの如く耳傾けて居る。とても近づいて來そうにないから、私は引金を引いた。

ドーンといふ音は狼の苦しい叫びと共に聞へた。私はホッと息ついて穴から跳ね上ると、パーも飛び上る。けれ共狼は其の場に居なかつた。併し、パーは露の消えた足跡を検べて云ふ――

『血を引つばつて居ますよ！』

成程草の上に血の跡あつた。

『的中したんでござよ。血を引つ張つて居ます。血を。跡追つか
けませう』

そこで二人は駆け出した。狼の行つた足跡と血の跡は歴然として見ゆる。傷を負ふた狼は屢々休んだらしい。斯うして居る中、

森中で一時間経ち二時間経つた。日は今や高く昇つて居る。吾々は足跡の外何も見出す事が出来ないで、大きな路を横切つた。すると足跡はもう處々消えてよく分らない。其から森の片隅に來ると、足跡は復暫らく續いて、池の方へと野を横切り、其から先は葦や菖蒲の茂つた水地の中に消えて居る。其から先は犬が居なければ行かれない。

『奴其處に居りますよ。私が明日探しませう』とパーは云つて、二人は歩を轉じて家路に就いた。

私は心ならずも思ひ切つて、何時もの通り苦しい思いをして歸つた。森に近づくと、一匹の兎が足下から飛び上つた。射る段ではない、私は吃驚して眼が覺むる様な氣がした。

『あゝ』とパーは奇々しく叫んだ。『弟でもあんな風に飛んだら、

射殺して呉れやうのに——」

私は只笑つて黙つて行つた。ホーレリの行く大道に續く、所謂森の道を横切る時、私は靴を穿つた馬の足跡を見た。新らしい足跡だ。

「パー、お前、何の足跡だか知つてるか？」

「其は、ホーレリの若子様か宅へお出になつた馬跡でせう」

「其ぢや、俺は歸るぞ、左様なら」

パーはおづ／＼と茅屋に寄つて暫らく休んでお出でなさいと願つた。拒んでは爺が氣の毒がるだろふとは思つたが、私は拒んで明朝を約した。自分の留守中にセリムとハニヤを一緒に置きたくは無いからだ。

ウスツリに行つてから五日間といふものは、セリムは毎日やつ

て來た。けれ共私は始終見張りして居た。然るに今日初めて私の留守中にあひびきをする事が出來たのだ。「今に見て居れ」と私は思つて「懺悔しなければならなくなるぞ」斯う云ひながら、私は全く希望を失つた者の如く蒼白くなつて居た。

私は其を不幸なる死の宣告の如く恐れた。

歸宅すると、家の前で、ルドビクに會つた。彼は袋や鐵網を持つて、蜜蜂の巢へ出かける處である。

「セリムが來て居るか？」と私は尋ねた。

「來て居ますよ。一時間半前來ました」

「何處に居るのか？」

「ハニヤとエツニヤを連れて池に行つて居ます」

私は直ぐと庭に出て、其から小舟の浮んで居る池の邊に出た。

ハニヤ

一番大きな舟は無かつた。池の面を見ただけ共何も見へなかつた。セリムは右の方へ廻つて赤楊の方へ行つたに相違無い。ボートとボートの中からは岸に茂れる葦の中に隠されてある。私は舵を取つて一人乗のボートに飛び乗り、葦をわけて静かに漕いで行くど、彼方からは氣づかれないで見える。

事實私は直ちに彼等を見つけた。葦の無い廣い池の面にボートが浮んで居る。其の端に座つて居るのが妹のエヅニヤで、ハニヤとセリムに脊を向けて居る。其の二人は他の一端に腰かけて居るエヅニヤは俯向きながら、小さな手で水の面をたいて、餘念無く喜んで居る。けれ共セリムとハニヤは互にもたれかゝつて、身を忘れて話して居る。一陣の風の戦ぎも無いから、透明な水面には漣波も起らず、ボートもハニヤも、セリムもエヅニヤも平靜な

鏡に映じた様に映じて居る。

何が何でも云へぬ美しい一幅の畫で、思はず、私の頭には血が逆上した。凡てが手に取る如く見える。妹のエヅニヤは彼等の云ふ事、する事を理解しないものだから、連れられて來たのだ。彼等は只外見の爲にエヅニヤを連れて來たのだ。「萬事休した」と私は思つた。「萬事休した」と葦もさよめく。「萬事休した」と、漣波も小舷を叩いて泣く。私はくらくくと眼が暗んで、寒くなつたり暑くなりたりした。眞蒼になつた様な氣もした。「汝はハニヤを失つたぞ！ 汝は彼女を失つた」と云ふ聲が頭の上にも心の中にも叫ぶ。其から又斯ういふ聲も聞える。「エスとマリヤ！」。けれ共又、「もつと前へ漕ぎ寄せて、葦の中に隠れて居よ。すると、もつとよく見へるぞ！」。然。私は猫の様に静かに近寄つて行た。けれ共

其の距離では二人の會話が聞きとれない。二人が向き合つて腰掛けて居るのが手に取る様に明かに見へるばかり。暫らくすると彼はハニヤの前に膝まづく様にして、ジツと身を寄せながらハニヤを見る。ハニヤは彼を見て居なかつたが、不安相にあたりを見廻して居た。そして漸く眼をあげた。確かにハニヤは混乱して居てセリムは何か懇願して居る様に見える。遂にセリムはハニヤに密接した。ハニヤはジツとセリムを見て居たが、遂に身を寄せた。けれ共直ぐとどに反つて、舟の端へと退いた。すると、セリムはハニヤが水に落ち込むのを恐れるかの如くに、其の手を捉へた。そして、其の手を緊と握つた儘放さなかつた。私は棹を置いて、舟底に倒れた。眼が茫んやりなつたからである。「神よ、あゝ神よ、助け玉へ！」と私は心の中で叫んだ。「彼等は私を殺さむとして居

ます！」息の止まる様な思がした。あゝ如何に私は彼女を愛した事よ。あゝ如何に私は不幸であつた事よ。舟底に伏し倒れ、憤怒の餘りに衣を割いて、私は轉々した。私は腕を縛られた競技者の如く無能であつた。何をするにも出来ないのである。私はセリムを打ち殺したかつた。舟を漕ぎ寄せて、二人を水の中に打ち込んでやるふかとも思つた。けれ共ハニヤの胸からセリムに對する愛を奪ふ事は出来ないぢや無いか。

無力の憤怒、頼りなき自覺、私は是程苦痛を感じた事は無い。私は一體一人隠れて泣く事をも耻として居つた。若し堪へられなくて涙ぐんだらば、高慢な力が復其の涙を引き込ませた。けれ共胸に塞つたやるせない怒りは遂に破裂した。吾が身の淋しさに、水に映じた相愛の男女を乗せた小舟の前で、閑静な空と、頭の上

に脱ぎ出た葦の葉を仰いで、悲痛絶望の餘り、落涙滂沱、無限の
歎にくづほれた。後頭を掴むで仰向に倒れ、一種名狀すべから
ざる悲愁の念に襲はれ、聲を呑んで男泣きに泣いた。
すると私はがつかりして無感覺になつた。考へる力も無くて、
手足の指先が冷めなくなる様な氣がする。段々私は氣力が無くな
る。けれ共力を盡して考へた。何だか死と冷酷なる静寂が近よつ
て来たやう。墓といふ淡氣味悪るい女王が私に何か語つて居る。
私は蕭殺、又茫然として其を見迎へてた。『これまでだ！』と思ふ
と、千萬斤の重さが私の胸から落ちた様な氣がした。
けれ共、『これ迄だ』と思ひ切られたものでは無い。其の儘何時
までも私は舟底に寝たつきりだつた。日の光や、低い雲が天の一
方に動いて居た。タゲリや鶴が悲げに叫んでは、絶へ間無く飛ぶ。

日は高く上つて、炎熱焼くるが様である。微風は死んだ。打戦い
で居つた葦は動かなくなつた。私は眠から醒めた様な氣持になつ
て起ち上りつゝ、あたりを顧た。ハニヤとセリムを乗せた舟は早
其處には居ない。あたりを見れば見る程、目覚めた時の麻痺的狀
態と全々反對で、自然は靜蕭と、休安と、喜びとに統御されて居
る。四顧すれば萬物悉く靜かに笑つて居る。青黒い水蟋蟀が、舟
の端や、楫の様に平つたい水百合の葉の上にとまつて居る。可愛
らしい灰色の鳥が涼しく囁つて葦の上を翔け廻つて居る。此處彼
處の水の上に蜜蜂が忙がしげにブズブズと働いて居る。時々菖蒲
の間から鴨が鳴いて来た。刁鳴がビヨビヨ水面に其の若い喜を叫
んで居る。私の眼の前には幕が開かれて、鳥の王國や共和政治の
隠れたる日常生活が暴露された。けれ共私は何も見ない。私の精

神麻痺はまだ癒へて居なかつた。日は暑く、私は激い頭痛を覺へた。舟の上に俯向いて、手を差し伸べ、池の水を掬ひどつて、焦げた唇で其を飲んだ。其で元氣がずんと出て來た。で櫂を取り上げ陸の方へ葦をおし分けて動き出した。餘り遅かつたもので、家では私を探して居つたのである。

飯路私いづみは自みづかからを慰なぐさめて思おもふた。

『若しセリムとハニヤが互たがひに戀愛れんあいして居る事を告白こくはくしたならば、萬事終つたのだから、其れでよし』不幸ふかうは其の帽子ぼうしの眉底まゆすしをどつて私の前に立ち塞ふさがり、晴々はれはれしい面持おもてして私を見みてゐる。私は其を知しつて居る。そして其と戰たたかはなければならぬ。不思議ふしぎにも、此の考かんがへが浮うかぶと、一種しゆく苦しい悦よろこびが心に生うじた。けれ共未だ私わたしは不安定ふあんていで、巧たくみにエヴァニアを檢しらべて、出で來る丈確たけめようと決心けつしんした。

た。

それから中食ちゆうじきの爲めに飯宅いづみし、冷淡れいたんにセリムに挨拶あいさつして、黙だまつた儘座ままざに就ついた。お父ちちさんは私を見みて、

『お前何まへなにうしたのか——具合ぐあいでも悪わるいのか?』と云いはれた。

『いゝえ、少し疲つかれたんです。今朝三時けささんじに起おきたものですから』

『何なんの爲ために?』

『バーと狼獵おおかみに出でかけました。一匹射びちました。其それから寢ねたところところが、少し頭痛づつうがして來て……』

『草くさの中に寢ねたのか。どうしたんだい』

ハニヤは一寸食ちゆうじき事を止やめて、私わたしをじろく見みた。

『大方おほま、昨日きのうウスツリにお出いなされた爲ためでせう。ヘンリク様さま』と彼女かのめは云いふ。

私は眞面に彼女を瞋み附けて、稍鋭い調子で尋ねた、——
『其は何の意味だ？』

ハニヤはまご／＼して何か辨解し初めたが要領を得ない。そこへセリムが口を出す。

『でも其は自然ぢや無いか。戀するものが疎くなるのは』

私はセリムとハニヤを瞋んで、一語一語に鋭い調子を入れ、

『僕は、君もハニヤも疎くなつて居るとは思はない』と云ふた。

二人の顔は眞赤になつた。一座が水を撒つた様に静かになる。

私自身には餘り云ひ過ぎたか否か分らない。仕合せにもお父さんは聞いて居なかつた。坊さんは、其は復若い者の何時もの戯談だと思つて、

『いそつは胡蜂の刺だな！』と、鼻をぶすと鳴らして突拍子に云

はれる。『蜂が刺に來たんだから、掴んではならないぜ』

其の一言が私を甚だしく感めて呉れた。私は喜ばしくてならなかつた。

中食が仕舞へて應接室を横切る時、妾見を見ると、成程私は死から復活した者の様な顔をして居る。眼の下が青くて、顔全體が打沈んで居る。不思議な程見苦しい顔になつて居る。でも誰も見て居るのでないから大丈夫。私は早速エグニアを探しに行た。二人の妹は少し以前に食事を済して定まつた遊戯場に出て居る。エグニアはブランコの横木へ四條の繩でぶら下げた木台の上に無雑作に腰掛けて居た。そして、黄金の髪を振つて足をぶらり／＼させながら何か一人語云ふて居る。私の影を見ると、笑つて小さな両手を擴げた。私は妹を抱いて、木の下路へと下つて行て、ベン

チに腰掛けエツニアを前に置いて尋ねた。

「エツさんは今日何して居つた？」

「エツはね、お嬢さんとハニさんとで散歩に行つたの」と小さな娘は高慢らしく答へた。

エツニヤはセリムをお嬢さんと云ふのだ。

「そしてエツちゃんはお行儀よくして居たかい？」

「そうよ！」

「いゝのね。お行儀のよい兒は、大人の云ふ事をよく聞いて居てちやんと憶へて居るものです。だが、エツさんはセリさんがハニさんに云ふた事を憶えて居るの？」

「忘れつちまつたわ」

「え、少つとも憶えて居ないの？」

「忘れたの」

「お前はお行儀がよくないのね。エツさんよく考へ出さないど、兄さんはもう可愛がつては上げないよ」

小さな娘は、握り拳で一方の眼をこすり初めた。一方の目は涙一ばいになつて居る。そして私を見て、ベソかいて、唇が慄へながら――

「私忘れちやつたの」といふ。

何うして這麼小さな兒が答ゆる事の出来よう。私は自ら、斯ういふ罪の無い天使を欺いた事を耻ぢて、つくづくつまらぬ事だつたと自ら思ふた。エツニヤは一家の愛物たるのみならず、又私の愛物である。で、私は之より以上に彼女を苦しめたくない。私は接吻してやつたり、髪をなで、やつたりして、歸さし、小娘は

キヨロく、鞆鞆の處へ駈けて行た。私は以前通りにすまし込んで立ち去つたけれ共、セリムとハニヤが心を打開けて語るふたといふ事を信じて居る。

夕方セリムが私に云ふには――

「僕は一週間程お目にかゝらないよ。旅行するから」

「何處に行くのか？」と私は變らぬ調子で尋ねた。

「父さんが、スムナに居る兄の處へ行けと云ふから、行つて一週間程滞在する積り」

私はハニヤを見た。ハニヤは之を聞いて何とも思はぬらし。岐度セリムは已に之はハニヤに語つたに相違無い。

彼女は微笑して裁縫しながら眼をあげ、稍狡猾に稍横柄に尋ねた。

「お出でになるのが御愉快でせうね。」

「猛犬が鎖にかゝる思ひです」と彼は答へたが、それのきり言葉を繼がず、バニーさんの怖い眼限を見て、斯う云ひ出した。

「御免なさい。私は叔父さんを好きです。併しね、バニーさんの處に居る方がもつと愉快である事は御承知ですからね」

斯う云ふと皆どつと笑つた。優しいバニーさんもセリムの耳朶を優しく撮むで、親切相に微笑み、

「私、お前のお母さんなのよ」と云はれた。

セリムは彼女の手に接吻した。バニーも亦セリムに接吻する。

私は考へた。セリムと僕とは何たる違いぞや。若し僕がハニヤの愛を得て居つたら、僕は只茫然やりと空を眺めたに相違ない。私だつたら笑ふ段だやない。然るに彼は笑つたり、滑稽たり、以前

と少つとも變らず愉快相にして居る。幸福を以つて輝く時と同じく何時も彼は愉快相にして居る。丁度出かける前彼は私に云た。

「僕の云ふ事を君は知らないのか。僕と一緒に出て来ないか？」

「いやだ。聞きたくは無い」

冷淡なる答は稍セリムを撃つた。

「君何だか變になつたね」と彼が云ふ。「どうかすると、少つとも分らないよ——けれ共——」

「止せ」

「けれ共、戀する者には凡ての事が許されるものだよ」

「人の妨げさへしなればよい」と私は嚴しい聲で答へた。

セリムは炯々と光る眼光もて私を睨んで、私の魂の奥底まで射貫いだ。

「君何を云ふんだ？」

「俺は第一出て行かないと云つてる。第二に、人は凡ての物を許さないと云つてる」

此の一場の會話で、凡ての問題は解決された。セリムは直ちに全問題を明めたのである。けれ共私にもつと積極的の證據を得る迄は凡てを解決したくなかつた。けれ共、私の最後の言葉はセリムに不安を與へ、ハニヤを驚かせた。セリムはまだ愚圖々々して出立せず、時を伺つて、低い聲で私に云ふた。

「君、馬に乗つて、少と出かけて呉れないか。話したい事があるから」

「復行かふ」と私は大きな聲で答へた。「今日は何だか疲れて居るから」

セリムは成程叔父さんの内に行つて、十日間滞在した。此の十日間は私共にとつて憂鬱な日であつた。ハニヤは私を避けて、恐ろしく見えて居た。私は何も眞實な心でハニヤと語りたくは無かつた。高慢な心があるので、言葉は口に絡まつて出て来ない。其からハニヤが悲しげにやつれて、段々痩せて行く哀れな様を見ると私は吾知らず慄へて『これは一時の出来心ぢや無い。可愛相に眞に深い戀をして居るのだ』と思ふた。

私は苛々したり、壓へ附けられる様に感じたり、無暗に悲しくなつたりした。お父さんから聞かれても、坊さんから聞かれてもパニーさんから聞かれても何とも云はなかつた。私は病氣になつ

て居たのかも知れぬ。然し病氣ぢや無いと自ら考へた。人々から心配して貰へば貰ふ程苦痛は増して行つた。或時は、森の中を歩いて見た。或時はポートに乗つて葦を分けて漕いで見た。野蠻人の様な生活もして見た。或時は銃と犬とを携へて森の中に入り、火を燃して終夜を過ぎた事もある。時には獸醫で牧者なる男と半日を過して、無限の荒寥を感じた事もある。此の男は澤山の植物を採集して、其の特長を研究して居たが、私に咒文と迷信の幻想的世界を初めて教へて呉れた。

或る日、ホールリなるミルザ、ダビドピッチを訪問しやうかといふ考が起つた。遂に思ひ切つて行つて見たら老人は大喜びで、大手を擴げて私を迎へた。其から私は考が變つて仕舞つて、輕騎兵大佐なる怖ろしいソピエスキの肖像を見たいと思ふた。何人を

も瞋み附ける様な其の悪相の眼を見た時、私は自分の家の應接所に懸つて居る先祖も決して劣らぬ程嚴肅な鐵の様な顔を持つて居る事を思ひ出した。

斯ういふ印象を受くると私の心は頗る昂ぶつて来る。孤獨、夜の寂寞、自然生活——凡て是等は一種の慰藉を私に與へたけれ共私の衷心には毒矢が刺されて居る。時々悪い夢を見て、目が醒めてからも妙な感じを誘はれた。幾度か遠い松林の中に寝たり葦の間の舟の中に臥したりして、嘗て室中でハニヤの足下に居たり、其の手足着物に接吻したり、其の慕はしい名を呼んだり、又ハニヤの方が熱い私の額に其の手をあて、「あなた、大變お苦しみ遊ばしたのね。もう何でもお忘れ下さいまし。皆夢で御座いました。私はあなたを愛して居ます、ヘンリックさま」と云ふて呉

れた事を想像した。けれ共目の醒めた、憂愁の現實は來つて私を捉へる。私の未來、曇天の様に淡暗い、しかも一生涯彼女無くして暮すべき私の未來。此の未來の觀念が私には頗る怖ろしかった私は人嫌ひになつて、遂にはお父さんをも、坊さんをも、バニーさんをも遠ざくるに至つた。よく語り、よく笑ひ、よくお道化る好奇心の強いカシオは特に厭になつて仕舞つた。

是等の親切な人々は私を慰めて、氣を散じてやるふとして居つたけれ共、何を云ふてよいのやら解らず、秘かに心配して居つたらしい。ハニヤには私の心を見貫ぐ丈の力があつたか何うか知らないが、私がロラを戀して居るのだと確信して私を慰めやうとするのである。けれ共私はハニヤに對しても苛酷な態度を取つたので、ハニヤは何だか怯々して言を云ふのであつた。お父さんは何

時も嚴格に容赦なく、私の氣を散じて、何か他の物に氣を向けさせやうとしたり、遂には私を試みたりなされた。度々お父さんは面白い話をして下さつた。或る日の事、中食が終へると、私共は家の前へ出て行つた。

「何か時々お前を苦しめはしないか？」とお父さんは訝かしげに私を見て尋ねられた。「永い間其の事を聞かうと思ふて居た。——セリムがハニヤに關涉するのが邪魔になるのか？」

事實を單明に判斷されて、私はまごつき、何う云ふてよいやら解らなかつた。けれ共私は、お父さんの言葉に動かされて、心を打明す様な弱い氣でなかつたから靜かに答へた。

「いゝえ、そうぢやありません」

お父さんが斯ういふ事を尋ねられるのは私にとつて苦痛であつ

た。私は只自分一人で此の問題を解決すべきものだと思つて居た。

「俺の云ふ事を保證しないか？」とお父さんが尋ねられる。

「保證しますが、セリムはワルソウの女學生を戀して居ます」

「お前に云つて置くが、お前はハニヤの保護者だ。ハニヤを管理するのはお前の義務だ」

お父さんは私の大望を喚起し、何物かに私の心を向けさせ、憂鬱な思想を追ひ拂つてやるふと思つて、斯う云はれたのだ。けれ共私は横着にも平然と構へて物憂げに答へた。

「保護者だとは何麼保護者ですか？あなたが被居るではありませんか。ニコライの爺は私にハニヤを頼んで死にましたけれ共、私は眞の保護者ではありません」

お父さんは是では駄目だと思つてか、顔を翳めて他の方法をと